

語り継ぐ

私の戦争体験

津山市

は じ め に

昭和20年（1945年）8月15日、我が国が終戦となってから71年目の夏を迎えました。

日中戦争、太平洋戦争において、戦地や国内等で多くの尊い命が失われました。命は失わなかったものの、今もなお心身に傷を負い苦しんでいる方は少なくありません。

津山市では、昭和33年に「世界連邦平和宣言」を、昭和60年には「非核兵器平和都市宣言」を行い、戦争のない平和な世界の実現に向けた様々な取組をすすめてまいりました。平成24年度からは、戦争の記憶・悲惨さを風化させず、後世に平和の尊さを伝えていくための取り組みとして、戦争に関する資料や遺品を収集しており、本年8月からは、常設展示を行っております。

この度、戦争を体験された方々からの体験談を、「語り継ぐ私の戦争体験」として1冊の冊子に取りまとめ、発行することとなりました。

ぜひとも、戦争を知らない、次の世代を担う多くの方々に読んでいただき、戦争の悲惨さを知り、あらためて平和の尊さを実感していただければと思います。

終わりにになりましたが、戦争体験談をお寄せいただきました皆様、そしてご協力いただきました津山市老人クラブ連合会の皆様に心からお礼申し上げます。

平成28年9月

【目 次】

松坂道夫さん	1 ページ
森 清忠さん	2 ページ
三牧泰昌さん	8 ページ
岡 秀雄さん	13 ページ
土居哲秋さん	15 ページ
藤本 毅さん	22 ページ
仁木正視さん	25 ページ
多胡恭太郎さん	29 ページ
為井英行さん	35 ページ
石原節子さん	38 ページ
坂手 均さん	40 ページ
大野木 一さん	43 ページ
河本震太郎さん	50 ページ
野田康之さん	54 ページ
影山命住さん	72 ページ

昭和16年、津山工業学校建築科に第一期生として入学しました。卒業後の昭和20年1月15日に19歳で神奈川県相模野海軍航空隊に海軍特別幹部練習生として入隊しました。そこではゼロ戦の教務を受けながら整備をしたり、飛行場の下に防空壕を掘ったりしていました。戦況が悪くなっていたので防空壕掘りが多かったです。訓練では“軍人精神注入棒”と書いてある棒で尻を殴られることもあり、大変厳しいものでした。訓練中に敵機が爆撃してくることがありました。敵機はゼロ戦ほどの小型機で低空飛行をしながら撃ってきます。敵機の操縦士が赤いマフラーをしており顔が見えました。弾は2m間隔くらいでババババッ！と撃ってくるので走って逃げたら当たってしまいます。敵機が近づくと「伏せー！」という声がかかり、飛行場の周りに掘ってある溝に、急いで体をすべり込ませて伏せていました。すぐ目の前を銃弾が走っていくこともありました。トタン屋根はすぐに穴だらけになりました。そこには6ヶ月ほどおりその後、愛知県半田市中島飛行機半田製作所に整備兵として行き、治具設計（飛行機の翼の型枠の設計）をしましたが、私が入る前日に製作所が爆撃されました。きっと名古屋を空襲しに行く行きがけに製作所が爆撃されたのだと思います。私たちは名古屋を通過して石川県小松航空隊に行きました。小松に行ってすぐ、広島に原子爆弾が落とされたと聞いて「これは、おえんぞ」と思いました。周りの人もそう言っていました。松林の中にある兵舎で10日ほど過ごして終戦を迎えましたが、将校が負けた悔しさで軍刀を振り回して松を切っていたのを見ました。幹部は「殺される」とも言っておりました。

終戦して8月20日に家に帰りました。航空隊本部から750円が贈られてきました。当時、課長級の月給が100円ほどだったと思います。私は50円ほどの給料をもらっており、農家から1個1円の芋を買って食べていたので、750円を頂いたのには驚きました。家では父が大工をしていましたので、それを手伝い私も大工をしました。



松坂道夫さん

89才

昭和18年4月20日、18歳で広島県の大竹海兵団に入隊し、3ヶ月の訓練を受けて戦艦伊勢に乗艦しました。私は、一般水兵第五分団で12.7cm高角砲の砲弾を運ぶ任務をしていました。

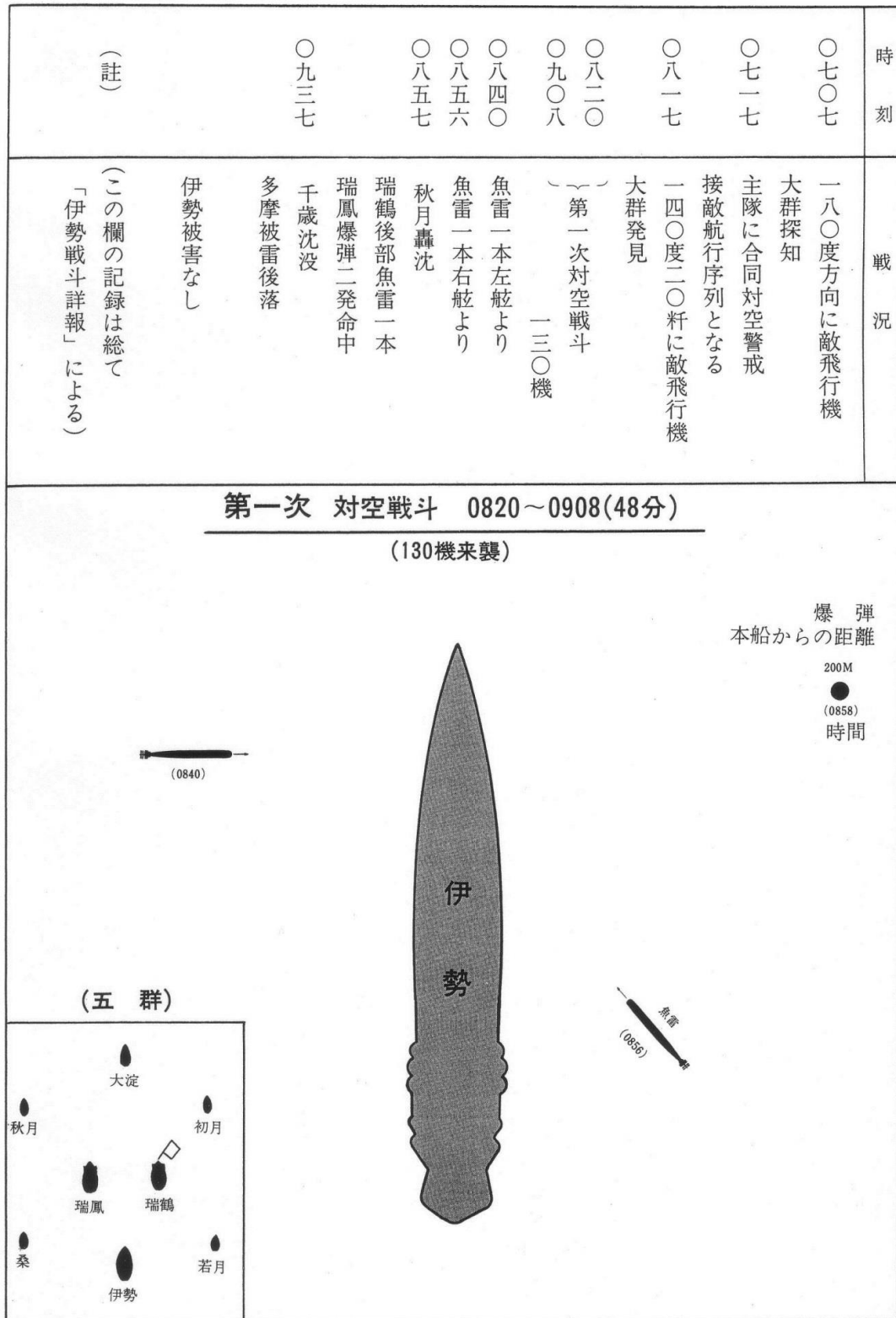
昭和19年10月25日フィリピン沖で大きい戦闘を経験しました。フィリピンのレイテ沖海戦は第一次から第四次まで（※表1～4参照）、丸一日かけた大戦でした。朝7時頃、朝食の支度をしていた時に「配置につけ！」と指示があり、乾パンをかじっただけで夕方まで戦闘は続きましたが、空腹は感じませんでした。第一次対空戦闘は7時頃から9時半頃まで、第二次は10時頃から10時半頃まで、第三次は13時頃から15時頃まで、第四次は17時頃から18時頃までというとても長く激しい戦闘でした。伊勢は重量4万t、全長200m、1,500人の隊員が乗り組んでいる大きい戦艦でした。その周りを100以上の敵機に上空を囲まれ空が黒く見え、まるで蜂の巣をつついたかのようなようでした。敵機の数多さに物資の差を見せつけられました。機銃、爆弾投下、魚雷の攻撃をされ、50kg弾を受けましたが無事でした。左舷には至近弾を受けて2cmほどの厚さの鉄板にずらっと穴が開きました。日本の船は空母などが次々と沈み、15隻中7隻しか残りませんでした。空母を撃沈され帰るところを亡くした戦闘機が海に落ちていくのを見ました。海は重油で真っ黒になり、黒い海の中、空母瑞鶴（ずいかく）に乗っていた人を伊勢に救助しました。左舷に受けた損傷で船体は傾きながらレイテ沖から奄美大島まで帰ってきて、そこで修理をして10月29日に呉に戻りました。

私が最後に伊勢に乗ったのは昭和20年2月10日から20日の北号作戦で、シンガポールから呉に物資を運びました。物資輸送用の船はもうほとんど残っていなかったのです。航路にはずっと敵の潜水艦が近くにいました。上空にも敵の小型機がついてきました。（図1参照）

そして、昭和20年2月末に私は伊勢を退艦しました。その後、戦艦伊勢は自走する燃料もなくなり、海上砲台として呉に停泊していたところ昭和20年7月に、米軍の空爆を受けて大破しました。もう少し長く乗艦していたら私も命がなかったかもしれません。「きっと亡くなったお母さんが助けてくれたのでしょう」と、妻がいつも言っています。

退艦した後、倉橋島の亀ヶ首にある学校で25mm機銃の訓練を3ヶ月受けました。その後、海軍陸戦隊で朝鮮半島に配属になり陣地構築をするということでした。

たが、20日ほどで終戦になりました。終戦作業は米軍の指示で弾薬処理などを
して、10月5日に勝央町の勝間田にあるおばの家に帰り、そこで農作業を手伝
いました。昭和30年に結婚をし、子どもにも恵まれました。
やはり、平和でないといけないと思います。



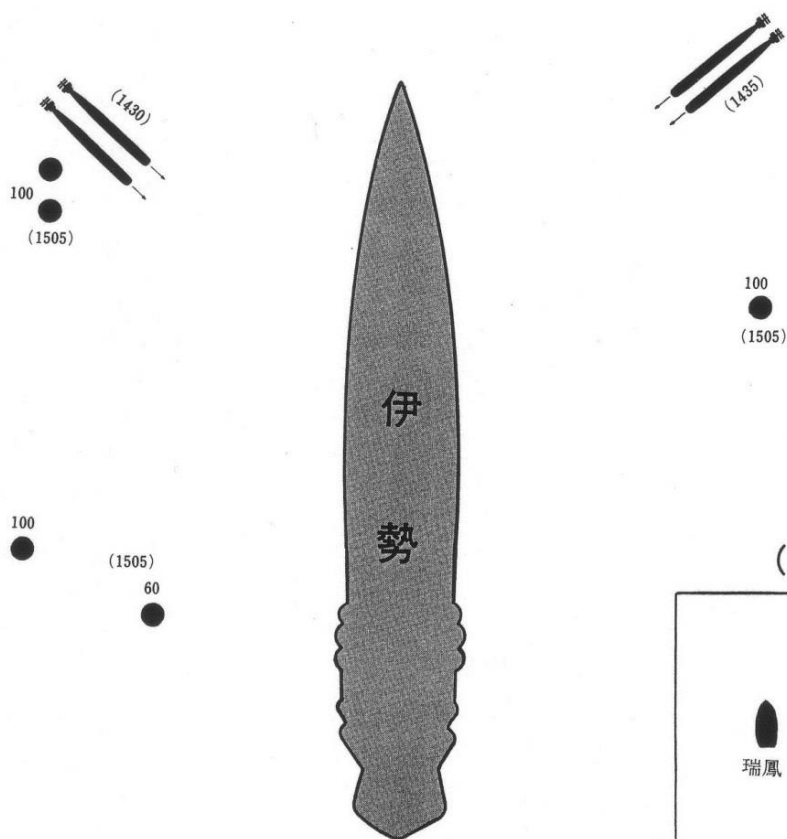
(※表1) 「軍艦伊勢 下巻」より

時刻	
戦況	〇九五八 一〇〇八 第二次対空戦斗 三六機 伊勢に一〇機来襲 至近弾八発 右舷 三〇米 一発 七〇米 三発 二〇〇米 一発 三〇〇米 二発 左舷 二〇〇米 一発 被害なし 千代田被爆停止 瑞鳳被爆 一〇二六 一〇三〇
第二次 対空戦斗 0958～1008(10分) (36機来襲)	

(※表2) 「軍艦伊勢 下巻」より

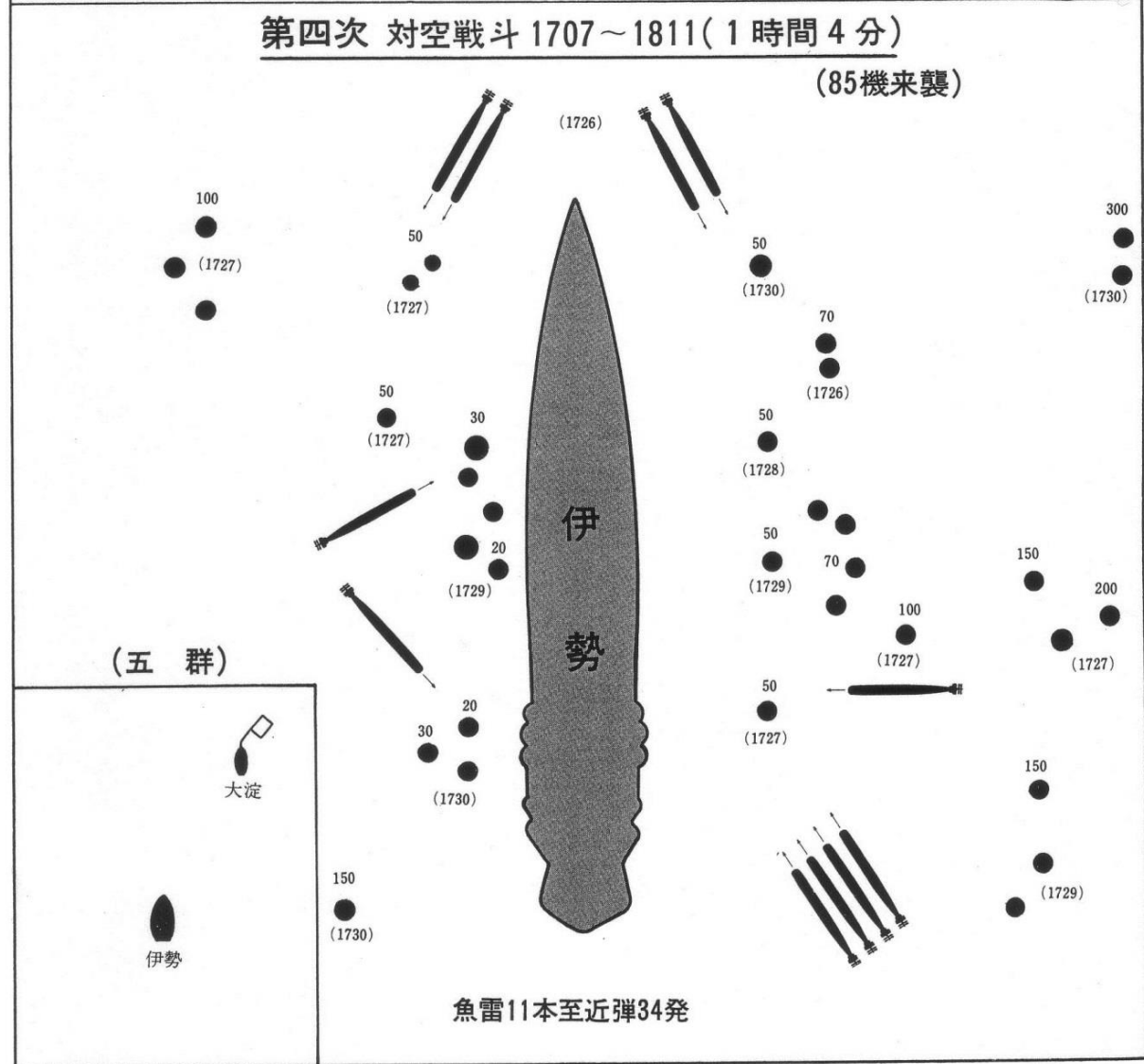
時刻	戦況
一三二〇 一五一〇	第三次対空戦斗 二〇〇機
一四一四	瑞鶴沈没 披爆及三本の魚雷による 将旗を大淀に移す
一五二六	瑞鳳沈没 次いて伊勢に攻撃を集中する。 四〇機来襲。右舷艦尾より急 降下二〇機。
一六〇五 一六二四	左右両舷より雷撃 被害なし 伊勢停止(約二十分) 瑞鳳乗組員救助 九八名
一六五五	千代田沈没 敵巡洋艦の砲弾三〇〇発に よる

第三次 対空戦斗 1310～1510(2 時間)
(200機来襲)

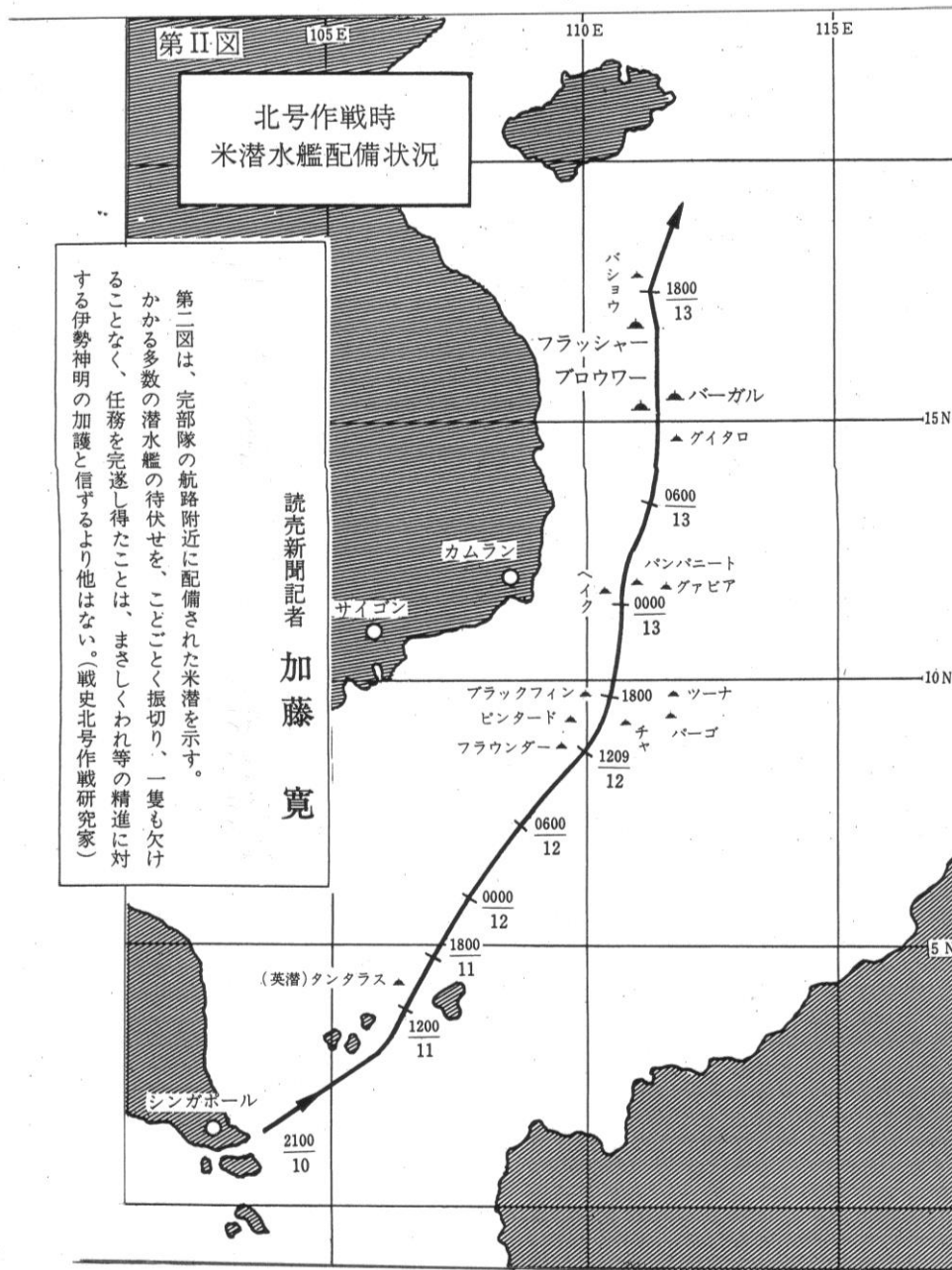


(※表 3) 「軍艦伊勢 下巻」より

時刻	戦況
一七〇七 一八一	第四次対空戦 八五機
二〇五六	初月 沈没 (救助人員満載の儘奮戦 敵重巡を含む十五隻と初月 一艦にて約二時間にわたり戦 斗の後壮烈なる最期をとげた) 初月、五十鈴敵水上部隊と交 戦中の報により反転夜戦を決 行せんとす 多摩沈没 敵潜による 敵影を発見するに至らず 反転北進 かくして軍艦伊勢の一番長い 日は終る



(※表4) 「軍艦伊勢 下巻」より



(※図1) 「軍艦伊勢 下巻」より



森 清忠さん

90才

私は中国電力に勤務していた昭和18年5月、20才の時に徴兵検査を受けました。そして、同年12月10日に広島市の旅館に集合との通知が届き、原隊は長崎県の電信第5連隊でしたが、広島に集合しました。そして宇品港から大きな貨物輸送船徳島丸に、新兵ばかり2,000人ほど乗りました。一昼夜で長崎県五島列島沖に船団を組み、私たちの乗った船を先頭に7隻の軍用船を1隻の駆逐艦が護衛した「堂々の大輸送船団」でした。

12月23日午前10時頃いよいよ船が動きだすと、だんだんと島が遠くなり、本当に戦地に行くのだ…と両親、兄弟、知人の顔が思い浮かんできて、まさに、感無量の心境となりました。このような光景はニュース映画で、軍艦マーチと共に勇ましく出港するのをよく見ましたが、まさに本物でした。

日が暮れた頃、私たちに集合がかかり輸送指揮官の吉井准尉が「お前たち初年兵はよく聞け。お前たちの命は俺があずかる。」と言い、そこで初めてジャワ島の第16軍通信隊の兵隊であることを知らされました。目的地がわかり、緊張感と戦争に対する恐怖心を自覚しました。船は東シナ海を台湾に向かっていました。この頃すでに、敵の潜水艦が出没し、この船団を狙っていました。潜水艦の出没によって船団は崩れ散りぢりになって目的地に向けて全速力で進み、時には大波に乗って船酔いのためか5日間ほど飲めず食えずでした。私たちの船は12月28日に台湾の高雄港にたどり着きましたが、船団の内の1隻は攻撃を受け、多くの犠牲者が出たと聞き冥福を祈りました。

高雄港で燃料と食料の補給をして、東シナ海を南下していきました。暑さはきつくなり、シラミの大群に悩まされました。突然、上陸するので装具を整えておけとの命令で、下船して陸送でいくように言われ、ベトナムの南部にあるサイゴン港に上陸しました。一回り小さな木造船に乗り替えて、黒く汚れたメコン河を上流へ進み、カンボジアのプノンペンに到着、ここは美しく静かな所で1週間ほど休養ができました。そしてまた、船と列車で移動しタイのバンコクにいったん落ち着き、貨物列車でマレー半島を南下していきました。停車、発車の予定時間が全く不明なので列車から離れることができず、暑くて非常に困難でした。私たちは南下する列車なので、北上する列車（南方戦線からビルマ作戦に向かう日本兵が乗っている）とすれ違うのですが、転戦や負けなどがわかってしまっているということなので、みな無言です。上りも下りもただ兵隊が行き交っているというふうに見せるのも作戦のうちでした。駅でない原野に緊急停車したり、駅に

2日間も停車したり、スコールが度々くる中、窮屈な貨物列車での生活が幾日も続きました。

とにかく動いたり止まったりの繰り返しで、昭和19年1月22日、やっとシンガポール（当時は昭南島と呼ぶ）に到着しました。戦渦の焼け跡のひどさに驚きました。そこで、姿は見えませんでした。南方軍総司令官の寺内寿元師の宿舎を見上げました。1週間ほど滞在して、木造船に200余名乗り組み、マラッカ海峡を渡ってスマトラ島の南側パレンバン経由でジャワ島のバタビヤ港に昭和19年1月30日に到着しました。港の入口付近には、おびただしい数の沈没船の残骸があり、ここはジャワ沖海戦の激戦の海だと聞きました。当時ジャワ島はオランダの植民地でしたが、オランダの軍は退却していて、すでに戦闘はありませんでした。昭和19年2月1日に入隊式があり、任務は各部隊との通信網の構築と保守で私は建築兵でした。日々の訓練と作業の宿題が出て、寝る間もなく次の訓練、手は豆だらけで血が出ました。「貴様らは戦闘を知らないからしっかり教えてやる」と古年兵、上級兵に殴られることが度々あり、初年兵同士、消灯後の兵舎裏で南十字星を仰いでお互いに涙ながらに励まし合ったことがありました。厳しい訓練だった一期の検閲が終わると、一等兵となり私は通信ケーブルの接続法の教育を受けました。現地の教官に習い、通信ケーブル接続法を“トッカンテレポン”と言いました。昭和19年10月から終戦までバンドン市郊外の山奥マラバル地帯に陣地構築の作業隊として班長以下10人程と歩兵数人で勤務していました。



旧日本軍の演習風景などを描いた絵巻

この頃すでに、戦況は不利な状態だとはっきりとわかっており、日本の敗戦は濃厚でしたが、ジャワ島には全く攻撃はなく、連合軍は沖縄の攻略とフィリピンの奪還に全力を投入しているようでした。しかし、いつかはこちらに来ることに違いないと各部隊が地下壕を掘り、武器、弾薬、食糧の確保に懸命でした。私はその各部隊の陣地間に通信線の埋設作業をしました。この地区には私たちの部隊の4中隊が無線班として在り、大本営と第16軍の交信の任務をしていましたので、即時日本の様子を知ることができました。沖縄、比島の戦況、3月の東京大空襲をはじめとして本格的な本土への攻撃は、日ごとにその激しさを増していきました。“○月○日、伊豆半島より静岡、名古屋方面にB29の大編隊が襲来し、多大な損害を受けた模様なり。○月○日、艦載機を先頭に約60機のB29が、紀伊半島より阪神工業地帯及び瀬戸内海沿岸の重要工業都市を襲い、被害は甚大にして壊滅的な打撃を受けり。”そして6月29日の岡山大空襲となり、戦況は極めて悪く、内地の方々は苦勞をされて大変なことだと心配していました。

昭和20年8月14日の夜は作業を終えて私たちは宿舎に戻り、現地の労働者は労働者の宿舎に戻ったのですが、8月15日の朝、作業現場には労働者が1人もいなかったのです。他の部隊でも同じことがあったそうです。

8月15日の天皇陛下のお言葉は雑音まじりではっきりとは聞き取れませんでした。日本は負けたらしいと全員放心状態でした。

その日から、日本軍に好意的だった現地住民が、手のひらを返したようになり非常に治安が悪くなりました。日本の作業部隊は急いで部隊本部に引き上げたのですが、ジャワ島の各地でインドネシアの独立運動“ムルデカ”が起きていました。現地人が日本の車を止め、武器や食料を出せなどと言い検問をし、一般人が暴動、略奪を始めたため本部に戻るまで大変でした。私の部隊も3日ほどかけて山中の宿舎にどうにか引き上げました。

私が何かの用事で中隊本部にいた時に、軍司令部から「下士官をひとりこちらに来させろ」と電話があったのですが、急ぎの用事だったのか兵長の私が行くことになりました。軍司令部までは500mほどの距離でしたが、治安が悪く非常に危険な状況の中、装具を持って必死に走って行きました。無事だったことが不思議なほどです。軍司令部では青木少尉が「お前、一人で来たのか!」と、驚きとても喜んでくれたので、私は嬉し涙が出ました。そして、青木少尉のもとで私は新しい任務につきました。私は兵長でしたが、他の部隊の下士官に指示したり連絡を取ったり多忙な日々を送りました。日本軍の各部隊が引き上げた空き兵舎を連合軍に引き継ぐまでの警備、邦人のホテル、オランダ人の家、オランダの婦

女子を収容していたバラックの警備をしました。そのバラックに今度は一般の日系人が収容され自活していくのです。夜には、私たちが警備している建物の周りを群衆が取り巻き大声を上げ、鉄柱を叩き大きな音を立て、氣勢を上げ夜明けとともに去っていくのです。そして毎晩のように代表者が武器を要求し、武器を渡さなければ命はないと言われました。私たちも護身用の武器を簡単には渡せませんでした。将校は「こんな所で犬死にすることはできない。」と、拳銃と剣を渡しました。ジャカルタの市内は極めて治安が悪く、各所で暴動や略奪が起きて日本の兵隊、邦人にも多くの犠牲者が出ていました。暴動や虐殺に怯えながらの生活は昭和20年9月20日頃、連合軍の上陸により共同警戒となり、やっと危険から解放されました。連合軍に建物の引き渡しをして、武装解除となりました。私は英軍の海軍中尉に時計と万年筆を取られました。そして、日本兵は捕虜となり重労働についたのです。私は青木少尉と共にバダビヤ港に入り、ここで日本人捕虜の食糧調達係をしました。他の部隊の下士官や兵を連れて、毎日アメリカ軍の事務所に行き、山のように積まれた食糧を受け取りました。毎日行くのでアメリカ兵とは顔なじみになりました。言葉は通じなくても身振り手振りで少しの会話はできました。アメリカとイギリスとインドの兵隊がいて、私は彼らから“USA”と刻印してあるフォークとナイフとスプーンをもらいました。

飯炊きの光景は異様なもので、煙と熱気と汗と油にまみれて煮えたぎる13個の釜の上を飛び回るような作業でした。日本人兵士の捕虜1万人ほどが倉庫にひしめき合っている状態でしたので大量の食糧も1人分にすればほんの少量でした。少ない食糧、寝起きの不自由、病気の療養ができない、革製品や衣類の窃盗、重労働の捕虜生活に当然不平不満は出てきて、もめ事がよく起きるようになりました。そこへ軍司令官だったと思いますが、来られて「このような事情だから、もうしばらくの間辛抱をしないといけない。」という内容の訓示をされたのです。すると統率がとれ、みなまじめに服し、私は誠に頭の下がる思いでした。さすが日本の兵隊さんだと思いました。

昭和21年1月に足痛が悪化し仮設病院に入院しました。部隊より、1人はぐれた私を助けてくれた青木少尉には本当にお世話になったので、厚く厚くお礼を言い別れました。

そして3月中旬、男性軽患者ばかり300人ほどが「日本に帰れるかもしれない」と半信半疑で、半難破船を仮修理したおんぼろの船に乗りバタビヤ港を出港しました。20日ほど過ぎても島影ひとつ見えず水と食糧は少なくなり「南シナ海を漂流して日本に帰れないのではないかと、誰かが言いだし騒ぎになりました。

た。船長が「機械の故障で方向音痴になっていて同じところをぐるぐる廻っている」と説明したので、もう運を天に任せるしかない、と思いました。

ある朝、偶然イギリスの駆逐艦に発見され、誘導してもらいベトナム南部にあるサンジャック沖に停泊中の旧海軍空母鳳翔（ほうしょう）に近づきました。この鳳翔は復員船としてこの地区の引き揚げ者を迎えに来ていたのです。この艦の船尾に日の丸が翻っているのが見えた時には疲れ切っていた全員が我を忘れ歓声を上げて感涙にむせび、抱き合って喜びました。

鳳翔に乗り移ってからは快調に日本へ向かい、昭和21年5月3日広島県の大竹港沖に停泊しました。

49日の海上生活という長旅でしたが、無事に日本に帰れた喜びと感激は生涯忘れることはできません。翌日、搬送船に分乗して大竹港に上陸しました。みな全身消毒で DDT をかけられ、頭から足の先まで、持ち物も全て真っ白になりました。5月6日、復員手続きを終えると、大金300円の手当と岡山までの切符をいただき、汽車に乗りました。大竹駅付近は一面焼け野原で、広島の悲惨さと、原子爆弾の恐ろしさを目にしました。岡山に着くと、私は岡山陸軍病院に収容されました。治部隊では私が一番早い復員兵だったのでハガキを買い、時計と万年筆と広辞苑をヤミ市で買い、戦友の家族へ実情を知らせました。

私を書いたハガキが届き母と弟が岡山病院に面会に来てくれ、無事を喜び合ったのですが、私の兄と父方の従兄弟3人が戦死したと聞き、悲報に泣きました。

その後、松江病院に転院し治療に専念し退院して、昭和21年9月20日に復職しました。

私の軍隊生活は3年ほどでした。初年兵教育として受けた厳しい教育（秩序正しく、規律正しく）は、良い意味で忘れられません。公私ともに生活で役立ちました。ですが、戦争はしてはいけません。日本は平和ですが、それだけでなく、全世界から戦争がなくなしてほしいです。



三牧泰昌さん

92才

私は三菱機械製作所に勤務していましたが、昭和20年3月1日に博多に集合して、満州のハルピン関東軍第366部隊戦車技兵第2教育隊へ現地入隊を命じられ入隊しました。そこで3ヶ月の陸軍本科教育を受けました。検閲合格後は戦車で戦闘に行くのではなく、教育要因として残り、初年兵の教育補助と戦車に対する技術教育をしました。

昭和20年8月9日未明、ソ連軍が突如として満州国境を越え、飛行機、巨大戦車（家のように大きい）をもって侵入、日本軍は各所で完敗しほとんど無抵抗でした。

8月15日の玉音放送を聞いた後は武装解除され、戦車、武器等をソ連軍に引き渡し、牡丹江へ結集のため250km余りを徒歩で向かいました。1,000人くらいで出発しましたが、到着した時は800人くらいになっていました。途中、逃げ出した人がいましたが、ソ連軍の監視と各地で暴動があり混乱していたので、殺されたのか逃げ切れたのかはわかりません。道中、死体の散乱、戦車の焼けた残骸を目の当たりにし、敗戦の無残さを感じました。

牡丹江へ到着後は、牡丹江駅で貨物車へ食料や物資を積み込む作業をしました。与えられる食糧だけでは腹が減るので、身に着けているものを満州の一般人に渡し、食糧をもらうという物々交換をしました。そして、9月中旬「ヤポンスキートウキョウダモイ（日本人、日本に帰れる）」と、私たちは牡丹江駅から貨物列車に乗せられました。みな日本に帰れると信じていました。ところが、太陽の位置から西方向に進んでいるのではないかとおかしいぞ…と、思いはじめました。

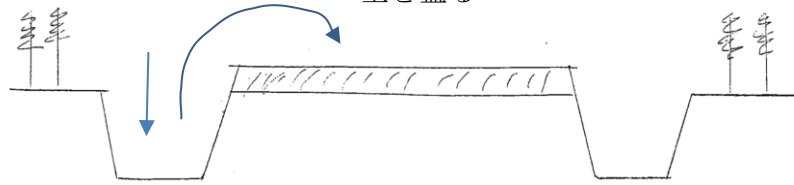
そして、バイカル湖であることを知らされ、タイセット駅で降ろされ、北へ北へと移動してバラック建てのラーゲル（収容所）での捕虜生活が始まりました。

まず、理髪、炊事、縫製、革職などの技能者は登録され、その職務につき、その他の者は第2シベリア鉄道工事作業（モスクワ～ナホトカ）で、2人組みで手ノコを使い直径50～80cmもの松を伐採し、伐採と株堀りが終わると両側の側溝部分を掘り、その土を鉄道敷き部分に土盛り作業をしました。夏でも1m下の土はカチカチに凍っていたので、薪を燃やし溶かしながら少しずつしか掘れませんでした。

木を伐採し

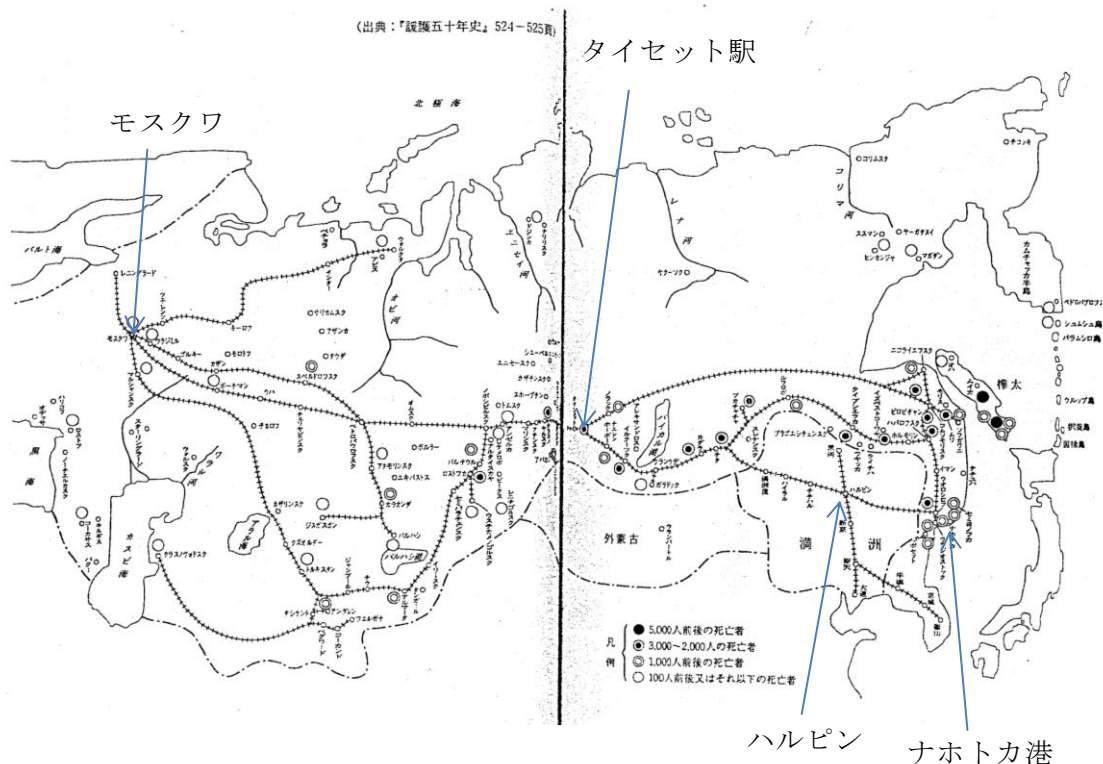
側溝部を掘る

土を盛る



私のシベリア抑留記より

その作業が完了すると、次の未開発地まで80km単位で北西に移動し、そこにはまたバラック建てのラーゲルが待っていました。その繰り返しをしながらどんどん北に移動していくうちに、夏は昼ばかり、冬は夜ばかりなので本格的な作業は4月から11月頃でした。冬は体感温度が零下60度にもなるので、室内待機をして、生活用の水や薪の運搬と便所の掃除（凍りついたところを砕く作業）などをしていました。食事が楽しみで、玄米をお粥のようにしたスープと黒パンを食べていましたが、みんないつも腹を空かせていたので、取りあいにならないように、器用な者が天秤を作って350gの黒パンを平等に分けました。部屋には電気はなく、白樺の皮を採ってきて明かり代わりに焚くのでカガリで部屋も服も顔までも真っ黒で目だけがギョロギョロしていました。



シベリア地図

ラーゲルでは、積極的に民主教育を勧めるアクチーブの養成、意識改革に務め、民主教育を徹底されました。「ハラショウラボウター トウキョウダモイ（優良労働者は日本に帰れる）」と言われ、信じて、飢えと寒さと過酷な労働に耐えました。

そして昭和24年8月、シベリア鉄道を経てナホトカ港より夢に見た舞鶴港へ帰港しました。数日間検疫を受け、苦労を共にした同士と別れを惜しみました。

父と知人の中学生が私を迎えに来てくれ、再会を喜び故郷の坪井駅に汽車で帰りました。坪井駅に到着すると、村長さんをはじめ多くの人に迎えられ、喜び合いました。

復員後、周囲に支えられながら社会参加できたことに感謝しています。

戦争をしてはいけません。絶対反対です。今の日本に戦争はありませんが、世界中から戦争がなくなければいけません。



岡 秀雄さん

91才

土居哲秋さん

平成28年2月15日取材

私が生まれた大正14年に治安維持法が制定されました。昭和になり私が成長するまで、満州事変や支那事変、そして昭和16年からの大東亜戦争とずっと戦争が続いていました。当時の男子は『国のため、天皇陛下のため』軍隊に入り戦地に行くということが精神的に決まっていたので、私は昭和19年に徴兵検査を受け、中部第131部隊の第1気象連隊（三重県鈴鹿市）に入隊しました。徴兵令の一番最後の年代が私たちの年でした。

入隊してから、それまで自分が思っていた軍隊内部の組織や雰囲気や空気というものが、くつがえされました。軍隊というのは規律正しく、まじめなものだと思っていたのですが、古参兵と新兵の落差とひどいいじめがあり、落胆しました。ですが、一旦入ったからには国のために尽くさなければいけないという一心でした。

一期の検閲が終わり、満州の新京（しんきょう）に派遣され教育部隊に入りました。私には通信技術がありましたので、モールス信号で秘密の暗号を使い軍隊

の無線通信などができ、教育隊から1人だけ選抜されて、昭和20年4月に満州第8398部隊第2気象連隊の連隊本部に配属されました。このことが後に、私にとって非常にマイナスになるのです。助け合ったり励まし合ったりする同期の“戦友”心を許せる友達が1人もいなくなったということです。

今はテレビやラジオで天気予報をしていますが、当時、気象情報は公開されてはいけなかった秘密情報でした。軍隊で一律に統括して、北は樺太（からふと）、千島列島、北海道から沖縄まで日本全国、中国の重慶（じゅうけい）、シンガポールという、東アジア全体の気象情報を集めて、私のいる部隊で4文字の数字の番号に組み、乱数表を使って暗号にし、それを無線で東アジア全域に送っていました。なぜ、こんなことをするかというと、飛行機の攻撃、毒ガス使用、海軍の出撃など全ての陸海空の軍事作戦に気象情報が絶対必要だからです。敵国にとっても重要な事です。

昭和20年8月15日終戦の当日は非番でした。音声が悪く、すぐには天皇陛下が何をおっしゃっているのかわかりませんでした。終戦がわかると、無線電波を発する送信所に向かい、軍事機密がたくさんあるので撤去しに行きました。送信所のすぐ近くには満州国軍官学校（日本陸軍士官学校と同じ）があり、そこには日本人生徒と中国人生徒がいたのですが、中国人生徒だけが残って開拓団の日本人に向け威嚇射撃をしていました。送信所には日本の兵隊がいる、と開拓団が頼って来られましたが、どうすることもできず、そこで初めての撃ち合いをして夜が明けるのを待ちました。

翌日は連隊本部に戻ったのですが、連隊本部の近くに満州国警察学校があり、そこでも日本人生徒は逃げた後で、中国人生徒が立てこもって撃ってくるので、ここでも撃ち合いになりました。殺し合いには至りませんでしたが、混乱した精神状態での撃ち合いでした。

8月17日には新京の駅に行きました。そこで見た悲惨な状況というのは言葉に表せないほどでした。日本人はみな裸にされて、女性は強姦され、男性は暴行され、殺害され、まさに地獄絵図のようでした。「日本が負けてこれだけの日本人が…ここまでの悲惨な目にさらされて大変なことだ！」と思い、その光景が一番初めのトラウマになったのです。終戦までは日本が中国人に対して好き勝手していました。奴隷のように扱ったり、土地を無断で取り上げたり、いじめのようなことをしていましたから、終戦によりその反動が一気にきたのです。日本人に対する恨みは大変なものでした。

それから1週間ほど、少しでも日本帰還に近づくように部隊長以下、行軍（徒

歩)で南下していきました。その間にも裸の死体がたくさんあり、日本人が単独で行動するのはとても危険だという状態が続きました。私は一人一人の人間が悪いのではなく、国と国との戦争が人間をそうさせていたのではないかと思います。

汜家屯(はんかとん)というところでソ連軍により武装解除され、公主嶺(こうしゅれい)戦車隊跡に収容され数日過ごしました。

9月13日の夜、「いよいよ明日は汽車に乗って内地に帰れる」と部隊長から訓示がありました。そのつもりで準備をして、コンクリートの土間の上でごろ寝をしました。

そして9月14日の夜明け前、目が覚めると雨が降っていました。小便をしようと外へ出て、また皆の寝ている所へそっと戻りました。まだ、雨の音は聞こえていて、意識もはっきりしていたはずなのですが、突然、故郷にいる母と妹が入ってきたのです。驚いて「お母さん、どうしたんなら？」と尋ねると、「哲がこれから、遠ええ(遠い)遠ええとこへ行く言うけん、もう会えんか思うて会いに来た。」と言うのです。私は「日本が負けたといっても、そんなめめしいことがあるか。夜が明けたら汽車で帰るんじゃ。皆が起きる前に早う帰りなさい！」と母を叱るように言うと「いねえ(帰れ)言うならいぬる(帰る)けど、体を大事にせえよ。」と言って母は帰ったのです。雨の音はずっと続いていました。それは夢まぼろしでしょうが、現実のように見たわけです。感情をあまり出さない母が虫の知らせで会いに来てくれたようでした。

夜が明けて乗った貨車は、日本に向けて南に行くと思っていましたが、北へ向かって進みました。私たちが居た新京を通過してハルピンを通過して…それでも、乗り換えて内地に帰れると思いましたが、松花江(しょうかこう)を渡ると南へ行く汽車はありません。10月1日にシベリアに入りました。ですが、私たちはシベリア抑留ということを知りませんでしたし、想定すらしていませんでした。黒竜江(こくりゅうこう)を渡ってソ連領に入ったのはわかりましたが、それでもウラジオストックの方から日本に帰れるかな…と望みを持っていました。

ところが夜が明けると、太陽が後ろに見えたのです。太陽が後ろにあるということは、貨車は西に向かっているということです。「あれ！？これはおかしい！」それでも貨車は西へ西へ向かいました。

ソ連の駅では汽車が停車するたび、現地の民間人が私たちの汽車に寄ってきて物々交換をしました。鉛筆などを欲しがられ、こちらは食べ物をもらいましたので始めに覚えた単語は“カレンダーシ(鉛筆)”“カルトーチカ(じゃがいも)”です。ソ連の人たちは物が不足し生活に困り、教育もなく数を数えられないという、

全てが不足したような生活をしていたので、日本の様子はわかりませんでした
「こんな貧乏な国に負けたのか…」と、とても情けなく残念な気がしました。

そして、バイカル湖をぐるぐると回りシベリア第2の大都会イルクーツクとい
うところに着き、イルクーツクの第7収容所へ収容されました。

そこは、南にはモンゴルに続く大きな山脈があり、海拔が高く北極海に近く、
冬は零下30度くらいが普通で、風が吹くと体感温度は零下60度といわれてい
ます。

『踏む雪の白さにいのち見失う』

『今日も生きていたと届かぬ母へ言う』

収容所は、フェンスで囲まれ4ヶ所に警戒兵が居て上から見下ろして警備をし
ている状況でした。

トルストイの小説にもあるように、帝政ロシアの時代にシベリアは流刑の地で
した。罪人をシベリアに連れて行き、シベリア開発のために重労働をさせた、ま
さにそんな物語の再現を思わせました。

シベリアでは大体6万から7万人の日本兵が亡くなり、行方不明者は10万人
もいるそうです。

シベリアに抑留されたと言っても状況はそれぞれ違います。共通してい
るのは“飢え”と“寒さ”の2つです。食糧難で、酷いときには小豆を煮た汁が
一杯だけということもありました。労働は、収容された場所と与えられた仕事に
よって様々でした。職人や通訳のできる人と手に職がない人で分けられました。
昭和20年から翌年の5月までの間、つまり抑留最初の冬に6万から7万人が亡
くなったということは、最初の冬を越してからはあまり亡くなった人がいないと
いうことで、抑留期間が長い人は比較的大事にされ、短い人ほど死と隣り合わせ
の仕打ちや労働をさせられていたということです。

いろいろな作業がありましたが、そのひとつに“アパート清掃”があり、ロシ
アの民間人の集合住宅の便所の掃除をするのです。便所といっても板を2枚渡し
ただけの便所なので大小便が氷になって積もります。その氷をコツンコツンと壊
し捨てに行くのです。作業の中ではラクな方でしたが、作業後、服に着いた氷が
融けたときの臭いに悩まされました。

それから“荷降ろし”の作業では、満州の物資を満州鉄道とシベリア鉄道を使
って運んでくるので、薬品などが運ばれてきたときにはブドウ糖の結晶を探して
こっそり食べました。

私はシベリアで“2度の死”を経験しました。“1度目の死”は水道工事の水道本管を埋める作業のときでした。イルクーツクはバイカル湖から北極海への川沿いにあるので、砂地なのです。湿気のある所の表面から1 mの砂は凍っていますがその下の砂は掘りやすいものでした。3 mほど掘るのですが、3 m掘るということは、盛り上げた砂がその上に3 mほどあるということです。その約6 mが土砂崩れになり、ザザザザー！とあっという間に埋まり、意識不明になりました。

『生き埋めの砂は三途の川の砂』

私は一番苦しんだのではないかと思います。先に申しましたが、教育隊から1人だけ選抜されて連隊本部に配属されて、同年兵が1人もいませんでしたので、苦勞に耐えるのに助け合ったり励まし合ったりする戦友がいませんでした。孤独な中で日本兵からひどい中傷を受けたのです。当時、私は20才で純真で“バカ正直”で、今もそうですがひとつのことを信じたらまじめに信じ続けてしまうところがあり、ずっと『国のため、天皇陛下のため』という気持ちだったので、悲惨な光景を見ても、シベリアに抑留されても、重労働に就いても、その気持ちは変わりませんでした。ですが、このままここで人生の最後を迎えるのか…と思った時に、何か書き残しておきたい。と思い、重労働の合間にありあわせの紙に、短い文を書いていたのです。現在も続けている川柳の始まりでした。

ところが、それが災いしたのです。「あいつはいつも何か書いている。あいつはアメリカのスパイではないか。」と言われたのです。収容所内でアメリカのスパイができるはずはありませんが、私が連隊本部にいて秘密の暗号を使い通信をしていたところからそんなことを言われ、それが日本兵から将校の耳に入り、将校からソ連の収容所長の耳に入ったのです。そして懲らしめのために、重労働を課せられたのです。それは“待機”という作業で、真夜中に入ってきた貨車に積まれている石炭を3人組で降ろすというものです。貨車が入ってきて1度目と2度目はなんとか作業を時間内にこなせましたが3度目はどうにもノルマが達成できませんでした。同じ日本兵でも他の組の人たちが、自分の作業が早く済んだから手伝おうかということは絶対にありませんでした。みな空腹と疲労で余裕がない状態で手伝いなどできません。罰として、私たち3人は現場監督に殴られ、蹴られ、作業の番をしていたソ連兵にも銃で殴られ、日本の将校にもやられました。いつ、どうなったかわかりませんが意識を失い“2度目の死”を体験したのです。それが真冬だったらそのまま凍死していたでしょうが、3月の終わりか4

月の初めでしたので、生きていたのです。このとき、頭の神経がどうにかなったのだと思いますが、両方の耳鳴りの後遺症は今でも続いています。

『撲られて蹴られて命馬鹿になる』

『地獄から息吹き返しても地獄』

私はシベリア抑留の“5悪”を経験しました。飢え、寒さ、重労働、この3悪はほとんどのシベリア抑留者が経験したのだと思います。4つめはシラミです。痩せこけた日本兵にシラミがたくさんついて血を吸うのです。肌着の縫い目にはシラミがたくさん入り、引っ張っても尻尾がちぎれるだけで取れません。シラミによって腸チフスが流行したくさんの日本兵が亡くなりました。私がイルクーツクにいた間に入浴は4回ほどあっただけです。風呂ではなく、熱気消毒というもので湯気がもやもやしたところに入るだけです。またすぐシラミが移ります。

5つめの悪は“日本兵”です。これが本当に私を苦しめました。“2度目の死”のとき私を「スパイだ」と言った者は、日本の将校に気に入られたかったのだと思います。少しでも食べたい、少しでも自分の立場を有利にするために他人を蹴落とす、人として最低なことです。その最低な行為の標的に私になったのでした。そんなことがあってもやはり、私を慰めて励ましてくれる仲間はいませんでした。ずっと一人で耐えていくしかない。孤独というものが一番苦しかったです。

人は生きるか死ぬかになった時、他人の事を考え、情けをかけるようなことはできません。これは、“戦争”がもたらしたものです。戦争とは人を極限まで追い込み、非人間的にしてしまうのです。

シベリア抑留で多くの日本兵が昭和20年の冬に亡くなり、昭和21年以降、ほとんど死者はいません。みな生きていくための要領を得てきたことと、春になり草花が生えるのでそれを食べて飢えをしのいでいきました。

私は昭和21年の夏に、イルクーツクから山の中のソフホーズという国営農場に移動になりました。それがあったから、体力の回復ができたのです。テントで生活し、人参やじゃがいもを畑に植える作業をしました。草取り作業の時には、こっそり人参を抜いてかじり、ばれないように葉や茎は元に戻しておきました。じゃがいもは種芋を植える10cmの間隔を20cmに変えて、余った種芋を飯ごうで炊いて食べました。イルクーツクで心身ともに極限まで来ていた私は、ソフホーズに行ったため助かったのだと思っています。

昭和22年、ナホトカに連れて行かれ“民主教育”を受け昭和22年5月12

日に舞鶴港に帰還しました。

帰還後、「シベリアに何年おられたんですか？」とよく聞かれましたが、シベリア抑留は期間ではなく、終戦の年の冬を越すか越さないかで生死がほとんど決まるので「早く帰れてよかった！」では、ないのです。早く帰ってきた人ほど、苦しい労働や仕打ちを受けて体を壊した人なのです。「土居さん2年で帰れてよかったですね。」と言われるたびに「そうではないですよ。」と話してきました。

ソ連は“働かざる者食うべからず”で、体力の無い者はいない、ということで倒れた人や体の弱い人から返されたのでした。

引き揚げて間もない24、25歳から両方の耳鳴りがするようになりました。医師に診てもらったところ「耳が鳴っているのではなく、頭が鳴っているのですよ。」と言われ“2度目の死”で受けた暴行が原因だと思っています。

内地に帰ってきてからは、少しの間療養し、結婚をしました。

そして、事業を始めたのですが、難聴の耳を部下や後輩に「都合の良いときは返事をするのに、都合が悪いときには返事をせん。」「聞こえぬふりをして何を考えているのかわからん。」などと言われました。シベリアで日本人同士の騙し合いで人間不信になり、ようやく帰ってきても誹謗中傷をされ、ますます人間不信になりました。運転中に頭がグラグラして平衡感覚がおかしくなることもあり、これで気が狂うか、これで死ぬのか、と思ったことが何度もありました。それは新京の駅から始まったトラウマでした。その度に、一人娘の名前を呼び続け正気を保とうとしました。「娘がいるから死ぬわけにはいかない。」と思い必死にハンドルを握り、耐えました。

私は今でも明るい夢を見ることがありません。昨夜もそうでしたが、いつも暗く苦しく追われるような夢しか見ないのです。夜になると現れる恐怖やトラウマやストレスは川柳にするしかないのです。

『胃を切ればどっと嘔きだす恨み節』

『免罪を背負うて走る影の父』

私の生い立ちから軍隊の組織、シベリア抑留でのトラウマから体験を通じて思うことは、戦争は絶対にしてはいけません。どのような理由があってもしてはいけません。今の内閣のしていることは“危ない”と思うのです。政治の批判をするわけではないのですが、とにかく戦争はしてはいけません。“積極的平和”ではなく、私は“消極的平和”を守っていくことが大切だと思うのです。人が“かた

き討ち”をするから戦争が絶えないのです。『やられたら、やり返す』のはスポーツだけでいいのです。もし、その気持ちで武器を持ってしまえば、戦争が始まってしまうのです。平和的な話し合いをすすめ、互いに少しの我慢をしながら納めるということを考えていってほしいのです。仕返しをしてしまうと一時的には気持ちは収まるのですが、いつかその仕返しがくるでしょう。その繰り返しがずっと続いていくかもしれません。

何度も言いますが、どんな理由があっても、絶対に戦争をしてはいけません。



土居哲秋さん
91才

藤本 毅さん

平成28年2月15日取材

海軍志願 私は昭和19年に海軍と陸軍を志願し受験してどちらも合格し、海軍を選びました。当時は『一億一心火の玉だ』と国家総動員の時代で、戦況は不利が伝えられ、B29による本土空襲も激しさを増す中でした。

出征 出征のときには家から美作千代駅まで近所の人や各種団体（在郷軍人・国防婦人会・青年団など）や親戚の人など多くの人の見送りを受け、千代駅広場で村長さんから激励のあいさつをいただき、私から「お国のため滅私奉公の気持ちで頑張ります。」とお礼とお別れのあいさつをしました。万歳三唱で汽車に乗り津山駅経由で広島呉大竹海兵団へ向かいしました。

入団 そして昭和20年1月20日、呉鎮守府・大竹海兵団に入団しました。初日は赤飯で祝ってくれました。第100分隊7教班に配置となり日々厳しい新兵教育を受け仲間と共に頑張りました。

罰直 全て連帯責任で海軍特有の罰直をたびたび受けました。“海軍精神注入棒”というバットで尻（けつ）べたを何発も叩かれ、気絶する者もいるほどの罰です。また他に、“鶯の谷わたり”とか“蜂の巣前にささえ”など気合を入れる罰直を耐えてきました。

面 会 母が大竹まで面会に来てくれました。その日には面会できず、その翌日に面会所を尋ねたら、私はカッター訓練で宮島遠漕の日で留守だったのです。親なれば母なればこそ吾が子に面会したいためには何でもする。母は見知らぬ人に頼んで自転車に乗せてもらい宮島へ、そして船着き場で会うことができました。持ってきた弁当の巻きずしを、人に見られてはいけなかったので便所に入って食べた事など、その時の事は忘れられない語り草です。

退 団 3ヶ月の新兵教育を精一杯勤務し成績優秀として表彰も受けました。その表彰状は今も大切に部屋に掲げてあります。

呉 駐 屯 昭和20年5月から呉市に駐屯し軍務に精励しました。7月末のB29の大空襲による呉市全滅の時は灰が峰を背にした高台の小学校にいて、その惨状を見ていることしかできなくて空しさを回顧していました。

敗 戦 広島と、長崎に原子爆弾（ピカドン）の投下、そして8月15日に無条件降伏、天皇陛下の終戦の玉音放送を江田島で聞きました。まさか…、無念で地に伏して涙したことはいつまでも忘れられない悪夢であります。

残務整理 敗戦の悲惨さ、混乱の中で終戦の処理、焼土と化した市街地の復旧、傷ついた人々、多くの被災者の生活などなど、焼け跡から立ち上がる戦いが始まりました。進駐軍は9月か10月に呉市に入ってきました。私は軍務の残務整理のため現地に残り、帰省したのは昭和20年12月でした。

戦 後 昭和21年4月に大東村農業会（農協）に就職し販売部で食糧（主に供出米・麦など）関係を担当し、戦後の食糧統制下の供出関係を主として担当しました。戦後の混乱期、ヤミ米・ヤミ市・ヤミ列車と言われ、ヤミ取り引きが横行していました。農家では供出割り当てがあり、それを完納することが大変な時代でした。

昭和29年から大井町役場へ就職し合併により久米町となり、爾来（じらい）平成8年まで奉職しました。その中で助役として3期12年務めました。

退職後は保護司活動24年、老人クラブ活動20年、仲間と共に地域の奉仕活動に励んでいます。『不戦平和の誓い』を守り戦争の悲惨さ・命の尊さ・平和の大切さを後世に語り伝えるのも私たち生きている者のつとめだと思い頑張っています。

鎮魂

戦後70年、今の平和の礎（いしずえ）となられた多くの尊い命を無駄にしてはなりません。

『散る桜 残る桜も 散る桜』

“自分たちの死を決して犬死にしてもらいたくない”

（ある特攻隊員の遺言）

いつまでも、戦後であり続けてほしい。

『平和こそ最大の福祉である』と、私は思っています。



藤本さんが作られた自分新聞…大竹海兵団の集合写真と家族で慰霊の旅をされたときの写真など（不戦平和の誓いを後世に伝承する活動と自分なりの運動を展開している、その一コマです）



藤本 毅さん

89才

私は17才の時、兵庫県にある陸軍通信学校に入りました。学校が東京の村山に途中で移動し、通信に関する訓練を2年ほど受けました。水泳の訓練があり喜んでいると、「船が沈んだ時にお前たちが1人でも泳いで生きて戦うためだ。」と言われました。6kmの遠泳の訓練があり厳しかったのですが、子どものころ近くの川で泳いでいたのが役立ちました。遠泳訓練があったので、南方に派遣されるのはわかっていました。

出征の日には、村中で盛大に見送られ「みなさん、生きて帰ってこようとは思っていません。」とあいさつしました。

そして、北九州の門司まで父が見送ってくれ、門司港からラバウルに向かいました。私は陸軍通信学校を出ていましたので初めから兵長という階級でした。アメリカがインドシナ半島、パラオへ上陸して戦闘をしていたので、そこへ向かう1万人程も乗れる大きい船に同じ通信学校から私たち15人ほど便乗し、途中でその船を降り、貨物輸送船に乗り替えてそれぞれの任務に分かれていきました。私たちがラバウルに着くと同じころ、民間人が乗った引き揚げ船が沈没したと聞きました。民間人はみんな引き揚げている、現地人が少しだけ残っているということでした。

ラバウル戦線は広く、私は方面軍総司令部に入りました。山の向こうから毎日何十機もの爆撃機が来て空爆があり、派手に爆弾が破裂する様子を「花火のようだ」と言ったのを、年上の兵隊に叱られました。町の一般人は引き揚げている、空襲と高射砲での攻撃、夜は艦砲射撃があり、町は壊滅状態でした。港には船が行き来していましたが、次第にそれもなくなりました。

方面軍司令部から各島に兵隊を送っているので、通信本部には毎日のように玉砕の電信が入り、中には“天皇陛下万歳”という内容のものもあり、戦況は厳しいのだとわかりました。私がラバウルに行ってからには現地で戦闘らしい戦闘というのはほとんど経験していません。

ある日、軍の偉い人が大根を1本持って来てくれました。それをみんなで分け合って食べました。その偉い人とは方面軍司令官の島田大将で、非常に意味のある事だったと後でわかりました。

日本の資源や物資は少なく、ついに飛行機が弾薬の輸送もできない状況になっていました。私は米を防空壕の中に担ぎ込む作業をし、腰を痛めても痛さに耐えました。

地下水か海水が侵食して作業のトラックが停車したら沈んで動かなくなってしまうような地形で、車は停車できないところでしたので、木材の積み下ろしは大変でした。

しばらくして、私は防空壕の支柱だと思われる木材の製材所の班長になりました。マラリアとデング熱で作業はできずしばらく寝ていました。数人の兵隊が看病してくれたのを覚えています。熱が下がり回復して、週番下士官の勤務に就きました。初日に、炊事班長にあいさつをしに行った時の事です。炊事班長の部屋を出たところで、炊事係に包丁をかざされ「軍隊は階級だけではないぞ！」と囲まれましたが、「班長に先にあいさつした後、みなさんにもあいさつするつもりだった。」と説明しました。怖い思いをしました。が、わかってもらえました。その中の一人が「何かあったら助けてやる。」と言ってくれ、その後は度々私の事を気にかけてくれたので気持ちの面で助けられたことがあり、とても心に残っています。そこでは、今まで受けた軍隊での教育とは、上下関係、人的構造が違っていているということをその人から教わったので、私は方針を変えました。農業などの作業に行く時には階級ではなく部隊で一番年上の人に指揮者になってもらい私は最後について行くことにしました。

現地では、食糧に関することが何より優先で、農業経験者が大切にされました。畑を作り、さつまいもなどの作物を植えました。

塩が必要なので海水を焚いて煙に注意しながら塩を作りました。煙が見つければ敵機の標的となり爆撃されるのです。飛行機が来たら木陰に隠れていました。ですが、その頃になると、敵も見逃してくれているように思いました。おそらくオーストラリア軍だったと思います。飛行機で近づいてきて、スコップを落としていくこともありました。「苦しいのはお互いさま」という思いだったのでしょうか…。畑や、塩を作っていたところを攻撃されたことがありませんでした。敵であっても敵意は無いように感じました。寝床は竹を叩いて薄くして寝台代わりにしていて、ほとんどの敵機が日本兵の寝床だとわかると攻撃はせずに通り過ぎて行きました。

ある時、上官と2人で小さな船で海に出て、方向がわからなくなってしまい海軍の基地にたどり着き助けられました。海軍は、爆薬を海底に沈めて爆発させ、そこへ数人で一斉に入って魚を拾い上げて魚を採っていました。海軍と陸軍で食料確保の方法は違いましたが、海軍の兵たちも生きるために必死で、武器弾薬を消耗してでも食糧確保をしていました。

私たちはカエルやヘビなど生き物を見つけると競争のようにして、早い者勝ち

で採りました。カエルは鳥のような味でおいしかったのを覚えています。コウモリだけは、臭いも味も悪く食べられませんでした。パパイヤの実は熟れるまでにみな競争のように見つけて取るので実は無く、パパイヤの木の芯を炊いて食べていました。米は非常に貴重で分け合って食べました。味もネバさも山芋そっくりな、どんぶりのような丸い芋を二度ほど食べたことがあります。大勢の兵隊でほんの少しずつ分けて食べました。防空壕に入れずに野積にしていた米をごまかして取ったり、栽培しているさつまいもを盗んだりした兵がいました。それが見つかり、穴を掘っては埋めるという無意味な重労働をさせられているのを一度見たので、それからは食糧についてはもっと配慮が必要だな、と思いました。空にしたガスマスクに米を入れ少しでも多く食糧確保をしていた人もいました。米が手に入った時には班の中で争いが起きないように配る順番を決めました。魚捕りが得意な人ばかり集めて、漁もしました。トラックで海から引き揚げるほど大量に採れたこともありました。私は軍曹になっていて、そのあたりの警備をしました。高級な魚は〇〇指令と呼ばれる人しか食べられませんでした。

野戦病院に入院したことがありましたが、病院といっても建物もベッドもありません。ヤシの木の根元が寝台代わりで、ヤシの木で雨をしのぐだけの場所でした。朝になると隣で休んでいた兵士がひとり亡くなっていたことがありました。

その頃、ラバウルの南の方向にあるニューギニアでは「食料も弾薬も何もかも無くなり、ただただ泣くしかできなかった。」という話を聞きました。

『南の島に雪が降る』という後に映画化された話があります。いつ日本に帰れるかわからない、戦闘はないものの物資と食糧がない状況の中、演芸で元気づけようという数名の日本兵がしてくれたのでした。白い糸をたくさん丸め、雪に見立ててヤシの木に登って降らせてくれたのです。それは相当な労力だったと思います。それを見た日本兵はみな、故郷を思い泣きました。

私は方面軍総司令部にいましたので、各地の空襲、原子爆弾投下など内地の様子は通信で即刻わかっていました。そして、終戦を知りました。

敗戦でオーストラリア軍の捕虜となったのですが、オーストラリア兵は「大変でしょうが、日本の再建をがんばりなさい。」と好意的に言ってくれたのです。捕虜になった私は電信線の異常がないかを調べる任務に就きました。オーストラリア兵は計算が苦手で、私たちが掛け算で出せる数でも、一つ一つ数えていました。日本兵なら誰でもできましたが、発電機で電気を点けたら「エンジニア」と言われたり、機械の接触が悪く叩いて偶然直ったことで「すばらしい！」と思われたり、技術者として大切にされたのです。（そのため、なかなか帰国できませんでし

た)

そして数ヶ月が経ち、ついに病院船で日本に帰ることができ、帰郷した時にジャガイモの収穫時期だったのを覚えています。

広島の実港に帰ってきたところで部隊解除をされました。広島の実の惨状を見た時に、改めて「日本は負けたんだ」と思いました。津山に帰りましたが、何となく肩身の狭い思いをしました。

話してみると短いようですが、私のラバウルでの体験はとても長く、苦労や複雑な思いもあり、語りつくせないほどの体験でした。

とにかく、食べ物に苦労した数年でしたが、私は一発の銃弾も撃ちませんでした。訓練は受けましたし「危ないときには撃て」と人に教えたこともありました。戦争は一発の銃弾から始まるものです。

津山に帰ってから、ラバウルで痛めた腰の手術を受け、その後は社会党の仕事をしました。毎朝、新聞を読み現地に行って話を聞きそれを議員に知らせるということをしていましたので、岡山県内を回りました。

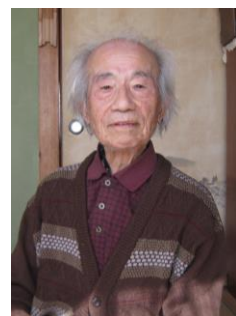
そして、社会党の活動や植物やホテルなどの自然を守る活動もして、全国各地に行き多くの執筆活動をしました。

私の叔父は、満州から原子爆弾が落とされた直後の広島に帰ってきました。国土防衛のため配属され、その後津山に帰ってきました。

その叔父は被ばくしていて津山に帰ってきた直後から、体が膨れ上がり、亡くなりました。

戦争は非常にたくさんの、軍人だけでなく民間人の命も奪っていきました。

今、思うことは“戦況のときには戦況の接し方、平和なときには平和な接し方”というものがあり、人と人とのつながりについて考えることがあります。



仁木正視さん

90才

私は昭和19年6月1日、陸軍特別操縦見習士官として宇都宮陸軍飛行学校金丸原教育隊に入隊し、将校としての教育及びグライダーによる操縦の基礎訓練を受けました。

まず、陸軍特別操縦見習士官について説明します。太平洋戦争末期、航空戦に立ち遅れた日本はミッドウェー、ガダルカナル等の戦いで優秀な操縦者を多数失い、従来の航空乗員養成・補充では間に合わなくなりました。昭和18年、陸軍は総力を結集して航空戦力増強を図る制度を模索し、昭和18年7月3日勅令第566号「陸軍航空関係予備将校補充及び服役臨時特例」により、学生の陸鷲への道「陸軍特別操縦見習士官」の制度が生まれました。

特別操縦見習士官は、高等専門学校程度以上の学校を卒業した者、または、卒業見込みのある者、現に徴兵検査を受け軍隊に籍がある兵及び幹部候補生で同等以上の学校卒業者で、志願する者を陸軍大臣において選考の上採用するというものです。修業年限は1年6ヶ月とし、陸軍飛行学校において教育し、所定の検査を受け合格した者は特別操縦見習士官として曹長の階級をあたえ、将校となるために必要な教育訓練を受けることになりますが、在学中の軍人としての基礎訓練を信頼し、まっしぐらに大空へ征けるよう、直ちに操縦訓練が行われました。修業年限は当初1年6ヶ月で少尉に任官できますが、戦火が激しくなるや1年足らずで基本訓練を終えて卒業させ、飛行隊に配属となりました。これが陸軍特別操縦見習士官です。

当時の軍隊生活は非常に厳しいものでしたが、私たちは入隊と同時に曹長の階級を与えられ大切に教育されました。なぜこんなに大切にされたかの理由を、戦後（平成8年）、我々戦友の会の来賓として出席された当時の教官である第二区隊長の谷口馨元少尉が、次のような話をしてくれました。

「私は皆様にお会いできる機会があれば、話したいと思っていたことがあります。私が区隊長を命ぜられたとき、隊長から『これからあなたが教育する特別操縦見習士官は全員が特攻隊要員である。戦況は厳しい。見習士官には気の毒だが、1日も早く訓練を終え、特攻隊員として散華（さんげ）してもらわないといけない。したがって彼らは“死ぬための訓練”を受けるのだから、将校としての基礎的軍事職能や航空専門の諸知識は無理をすることなく習得させ、操縦訓練こそ最優先させるものと心得て、特別操縦見習士官を教育してほしい。』と言われました。

私は心の中に寒気を覚えました。何も知らない純真な学生であった皆さんは1年以内に戦死することを知っていたのでしょうか。“死への訓練”をどんな気持ちで受けていたのでしょうか。私たち士官候補生出身の将校にはどうしても理解できず、ただただ毎日が悲しい訓練でありました。昭和19年8月1日、皆さんが校歌を歌いながら元気いっぱい到下館教育隊に入隊して来られましたが、私は隊長の言葉を思い出すと、皆さんがかわいそうでかわいそうで、まともに顔を見ることができませんでした。今思い出してみても、下館教育隊の操縦訓練は誠に厳しいものでした。それを皆さんは耐え、教官たちが驚くような早さで習得し、さすが全国の大学から選抜されてきた方々は違う…と、敬服さえしていました。皆さんは、飛行訓練以外は案外やさしい扱いを受けたと思われませんか？この理由は皆さんが“死ぬための訓練”を平常心で受けていることに教官たちが感動し、少しでも皆さんのお役にたてれば…と、思ったからです。」と話をしてくださいました。

日本は太平洋戦争を短期決戦で勝利できると思っていたのですが、戦争は長期戦となりました。殊に、ミッドウェー海戦で空母をはじめとする多くの戦艦を失い、急速に制海権をなくしていきました。その結果、南方からの石油の供給は途絶え、備蓄していた石油も底をつくようになりました。

昭和19年10月頃よりは、私たち操縦者の訓練用航空燃料も不足するようになりました。特攻隊員が次々と戦死し、これの補充が急がれる反面、育成のための燃料が不足するという絶体絶命の状態に追い込まれて行きました。ここで日本はいかなる手段を講じてでも石油を確保しなければならない状態になりましたが、この時点で石油を入手できる可能性は、わずかにシンガポールの油田にしかありませんでした。日本は油槽船の建造を急ぐかわら、民間の油槽船も徴用して船団を組み、シンガポールへの強行突破を試みました。しかし、この強行策もすでに制海権を連合軍に握られていて成功確率はゼロに近いものでした。この強行突破船団に便乗して私たちはシンガポールに渡り、特攻隊員としての訓練を受けることになったのです。

昭和19年12月31日、この日は粉雪が舞っていました。検疫を終え黒潮丸に乗船しました。後に聞いた話ですが出航のその日、参謀本部から燃料関係の参謀が飛行機で駆けつけ「この船団のうちどんなことがあっても5隻ぐらひは燃料を満載して帰ってきてほしい、さもなければ戦争に対する見通しがたたない。」と悲痛な言葉を語ったとのことでした。

米潜水艦に追われ魚雷攻撃を受けながら、かろうじて1月8日台湾の高雄港に入港しましたが、ここでまた大空襲に遭い船団は全滅、シンガポールへの派遣は不可能となり、台湾で勤務することになりました。しかし、台湾にも私たちを操縦者として訓練するための石油の備蓄はありませんでした。操縦者としての訓練を断念させられた私たちは、飛行場の管理をする飛行場中隊に配属になり、そこからそれぞれの任地に転属していきました。高等工業卒業者は整備隊へ配属され、私は文系だったため第9飛行団司令部の作戦室勤務を命ぜられました。

戦況は刻々と悪化していきましたが、鹿児島県の知覧（ちらん）や台湾の宜蘭（ぎらん）からは沖縄に向けて、特攻作戦が行われていました。台湾では各部隊から宜蘭に集結し、早朝または薄暮に沖縄を攻撃するというものです。

特攻作戦の命令書を作成するのは簡単なものではありません。私が勤務していた第9飛行団は隷下部隊に105戦隊、19戦隊、43独立飛行中隊がありました。各部隊は20機ほどの戦闘機（飛燕・三式戦）を保有していました。まず、第8飛行師団から第9飛行団に命令が来ます。作戦室で作成命令書案を作り、飛行団長の裁可を得て、各戦隊に特攻出撃を命じます。命令を受けた各戦隊長はここで特攻隊員を指名しなくてはなりません。戦隊長の心情を推察すると、夜も眠れないほど辛いものでした。

終戦の直前になると、それまで本土決戦に備えて温存していた熟練操縦者も次々と特攻隊員として出撃するようになりました。しかし、この頃すでに日本軍の戦闘機の保有数が少なくなり、練習機で特攻隊を編成しなければならなくなりました。優秀な戦闘機でさえ250kg爆弾を搭載して目的地まで飛ぶのは容易なことではないと思われるのに、練習機での出撃はもはや無謀という以外の何ものでもありません。

私が兄のように慕っていた飛行学校時代の助教平木曹長もすばらしい操縦技術を持ちながら、練習機で特攻に行ったひとりです。

ちなみに、数年前戦友たちと鎮魂に鹿児島県の知覧に行った時のことです。宿泊先から知覧特攻平和会館に向かうタクシーの中で、当時の話をする私たちの運転手はそっけなく適当な相槌を打っていましたが、平和会館に着き職員が私たちを出迎えてくれると、それを見た運転手が「あなた方は本当の特攻隊員だったのですね。」と泣きながら謝ってきました。あたかも経験したように言っている人が多いこと、また、それだけ真実が語られていないということを感じました。知覧特攻平和会館の展示品の中に、昭和20年4月22日、沖縄に向けて出撃する直前に書かれた寄書がありました。その方々の中には私たちの教官が含まれてい

ました。そして、平木曹長の書かれた文字もありました。彼は7人居た朝鮮人の特攻隊員の1人でした。12、3年ほど前、何となくテレビをつけると偶然、平木曹長の写真がテレビに出てびっくりしました。ドキュメントで特攻の番組「青春・命」を放送していたのです。とても不思議でした。平木曹長が私に見せようと思ったのでしょうか。

『散るものと 思へど悲し 花吹雪』（私が作った平木曹長への鎮魂歌です。）



左端が多胡さん、左から3人目が平木曹長



平木曹長の写真（知覧特攻平和会館）

ひとつ悲しい思い出を話してみましよう。昭和20年4月11日のことでした。よく飛行機を見に来ていた中学生（桃原良太）と一緒に、特攻機の見送りをしていた時のことです。滑走を始めた直後突然、飛行機が私たちの方に向かってきました。ほんの一瞬の出来事でした。私は瞬時に伏せましたが、隣にいた見習士官は車輪で体をひかれ亡くなり、中学生はプロペラで切られ無残な姿になっていました。幸い、事故を起こした特攻機は爆発せず、再び特攻に出ることになりました。中学生の母親はその操縦者に事故で亡くなった我が子の骨を持たせましたが、再びこの特攻機は不時着し戦死することはありませんでした。



宜蘭飛行場滑走路跡にて祈りをささげる
多胡さん（平成26年）

特攻隊員の本心はみんな悲しく、尽忠と生への執着との戦いではなかったでしょうか。昭和20年の特攻隊長の約半数は特別操縦見習士官の出身でした。ちなみに陸軍の飛行機による特別攻撃隊員は1,404柱ですが、その中の310柱(22%)は特別操縦見習士官出身、457柱(32%)が少年飛行兵出身でした。

特攻隊員になると三角兵舎という半地下の兵舎で出撃命令が出るまで、待機していました。

指名された隊員は特攻前夜、肩を組み勇敢な歌を歌ったなどと言われていますが、そんな光景などなかったと思います。私が週番で兵舎を見回った時のことです。聞こえてきたのは“森の小径(こみち)”という歌でした。

『ほろほろ こぼれる 白い花を
うけて泣いていた 愛らしいあなたよ
憶えているかい 森の小径
僕もかなしくて 青い空仰いだ
なにも言わずに いつか寄せた
ちいさな肩だった 白い花夢かよ』

私は涙が止まりませんでした。この歌こそ特攻隊員の心をうたった歌だと思います。故郷の人、愛しい人、また、お世話になった人を思い歌っていたのではないのでしょうか。命を国のために捧げるという気持ちは純粋なものでしょう。しかし“生きたい”という強い思いもどこかにあったと思います。特攻隊員も普通の少年であったことを知ってほしいと思います。

『お父さん、お母さん、元気に国のために命を捧げてまいります。』という、その言葉の裏にどんな気持ちがあったのか、考えてほしいのです。日本の国を守ったのは、こういう若い人たちなのです。



第80振武隊隊員一同
特攻隊員の写真(知覧特攻平和会館)

私がいた司令部には第16航空通信連隊があり、師団司令部からの情報が刻々と入っていました。終戦も通信でいち早く知りました。終戦後は、書類などの処分に追われました。

現地人から報復があるのではないかと、裁判があるのではないかと現地ではデマがとんでいました。困ったのは、現金がないことでした。20歳の私は部下30人ほどを連れて現地自活をするように言われ、農業をしたりトラックを借りて荷物を運んだりして収入を得、どうにか食べて行きました。台湾の現地の人とはとてもやさしくしてくれ、日本に帰る時には互いに泣きながら別れを惜しみました。

昭和21年2月25日、鹿児島港に着き、復員列車に乗って岡山駅の復員事務所で手続きをし、なつかしい我が家に帰りました。

私たちは下館教育隊のあの厳しい訓練を“死への訓練”だと知っていました。1年以内には皆戦死するのだと承知の上で必死に訓練を受けていました。

歴史研究の目的は“過去を知り、現在に処し、未来に備えること”だと思います。人生には流れがあり、止まってはいけないのです。戦後、平和が当たり前になり気ままに生きてきたため、国に対する報恩、親に対する感謝や愛情が欠けてきているのではないのでしょうか。親は子を思い、子は親を慕い、次の世代にその思いを伝え、子はそれを受け継いでいかなければなりません。

私は、戦争体験を長年語らずにいましたが、この度、本当の事を伝えたいと思い取材に応じることにしました。私たち多くの若い命がこの国を必死に守ろうとしたことを忘れないでほしいと思います。

数年前、下館会という戦友会で「もし、今戦争に行けと言われたらどうする？」という話をしました。皆、異口同音に「国のためだったらいつでも戦争に行く、命を出す。」と言いました。

最後に、昭和46年3月京都の霊山護国神社の境内に建立された特操（特別操縦見習士官）の碑文を紹介します。



若き日の多胡さん

特操の碑（碑文）

第二次世界大戦が転機をむかえた昭和18年、日本の戦況は急に悪化し存亡をかけた総力戦となる。この年、2,500余の若人は学業をなげうち陸軍特別操縦見習士官として祖国の危機に立ち上がった。2期、3期、4期と続くペンを操縦桿にかえた学鷲は懷疑思索を超え肉親友への愛情を断ちひたすら民族の栄光と世界の平和を目指して死中に生を求めようとした。

悪条件のもと夜を日についた猛訓練を行い、学鷲は遠く大陸、赤道をこえて雄飛し、あまたの戦友は空中戦に斃^{たお}れた。また、特攻の主力となって自爆、沖縄本土の護りに殉じたのであった。無名の栄誉は歴史に刻まれたが愛惜と悲しみは尽きない。平和は血と涙により築かれた。われらは心から祖国を愛し平和を願う。ここに兄等の栄誉を讃え、その霊を慰むるとともに特操の果たした役割を永く後世に伝えぬとするものである。



多胡恭太郎さん

91才

為井英行さん

平成28年2月29日取材

昭和19年4月、私は津山の男子校を卒業し、14歳の時に滋賀県大津市別所町にある大津陸軍少年飛行兵学校に18期生で入学しました。早かれ遅かれ、みな兵隊にいく時代でしたので、「どうせ行くなら早く学校に行こうか」という感じだったと思います。入学前の試験は、身体検査や学科試験を1週間ほどかけて行われました。

1中隊に200人程おり、8中隊あったので1,600人程が同期で入り、半年

後には1期下の人たちが入ってきました。そこで1年間、兵隊になるための基本訓練、銃の射撃練習、夜間演習や、算数、物理などの勉強をしました。教養を深めるため京都の神社などや伊勢神宮への参拝をしたり、三重県津市の阿漕へ遊泳に行ったりしました。日曜日は休みで面会は自由にでき、母が何度も面会に来てくれました。8月には、1週間の盆休みがあり、実家に帰ることができました。



「軍服の青春」より 大津陸軍少年飛行学校の入校式

昭和20年4月1日に、岐阜陸軍航空整備学校に上等兵で入りました。私は空564部隊3中隊1班に所属しました。私たちの1期上の人たちは京都の島津製作所で教練を受けていましたので、私たちの中隊には同期の50人くらいしかいませんでした。入隊して半年ほどで島津製作所に行き、その半年後には戦線部隊に整備兵として入る、というものでした。島津製作所は機体と精密機械の工場で、発動機や大型機に取り付ける自動操縦機を造っていて、そこで技術を学ぶのです。ときには、映画や観劇などの慰安がありました。

昭和20年4月、私たちの居る場所は「いつ空襲に遭ってもおかしくない」ということで、バラック兵舎を部隊の施設から離れたところに建てることになりました。そして、兵舎を建てる材料が必要なので、同期生と二人で近くの製材所をお願いをしようと出かけました。

岐阜の那加駅の少し南にある製材所に着いてほんの10分ほどだったと思います。装備を外し、くつろいで製材所の人と話をしていた時、製材所の周辺が空襲

を受けたのです。私は倒れてきたものが上に倒れてきて頭に大ケガを負いました。

しばらくは療養をして、中隊に復帰するとバラック兵舎は完成しておりました。その頃、特別幹部候補生が入隊したのでその人たちを部下に、奥宮の御井（みい）地区の警備を主にしました。私たちは小さい山のような所のバラック建てで生活し、通信も何もない所だったので特別幹部候補生を連れて、自分たちで一から通信用の線を張り巡らせて自活していきました。作業中に一度、アメリカ軍の戦闘機グラマンを近くに見ました。

私たちの居た所から少し離れた場所にある各務原には、陸軍各務原飛行場、川崎航空機（現在の川崎重工業）岐阜工場、三菱重工業名古屋航空機製作所各務原格納庫、陸軍航空廠（こうくうしょう）などの軍需工場が多くあったので空襲の対象地になり、6月から7月には何度もアメリカ軍の戦闘機が上空を通過していました。P51という戦闘機はエンジンをかなり改良したような軽い音で飛んで行きました。その音を今も覚えています。

昭和20年8月10日頃から数日間、岐阜市日野の長良川近くのお宮で10人ほど連れて作業をしていたところに中隊の将校が来られ、ラジオを聞くように言われて聞きましたが、音声が悪く何を言われているのかはわかりませんでしたので、昼寝をしました。そこに、また将校が来られ、バラックまで帰るように言われました。それが昭和20年8月15日、終戦の日でした。

そして、召集兵を家に帰らすような段取りをして、私たちは片付や書類の焼却などをして9月1日に部隊解除になりました。

昭和20年9月15日ころ、岡山駅まで列車で帰り、貨物列車の津山線に乗りました。帰ってみると津山城の模擬天守が無くなっていました。空襲の目標にされるのを恐れて取り壊されていたのです。津山に帰った翌日だったか…台風による大雨で津山の今井橋が流されて驚きました。

その後、広島の中高等学校に編入で入りました。卒業後は国鉄に務めました。新見で機関助手になり、大阪にディーゼル機関車の勉強しに行ったり、岡山、新見、津山を列車で行き来したりしました。当時は大阪万博が開催された頃でたくさんの乗客を乗せました。

私は、戦争は二度と起こってはいけないと思います。



為井英行さん

86才

私は昭和20年6月29日、15歳の女学生だった時に岡山空襲に遭いました。午前3時頃でした。岡山市清心町の自宅で寝ていたときでした。「ドドドドッ！」という轟音で飛び起きると、南側の障子が真っ赤でした。「空襲じゃー空襲じゃー！」4歳年上の姉は素早く起き上がり、蚊帳の吊り手を引きちぎり、一緒に寝ていた母と小学4年生の妹と私を起こしました。寝床のそばに用意していた服に着替え、日頃からまとめていたわずかな荷物を入れたリュックを背負い、布団を被って玄関から急いで出ました。(その时空襲警報の知らせはありませんでした) 外に出た瞬間「ダダダダッ！」と、我が家の板塀から玄関にかけ、真っ赤な焼夷弾が落ちるのを目のあたりにしました。それはそれは何とも言えない恐怖でした。瞬間、母と姉に逃げ遅れ、妹と私ははぐれてしまいました。布団を頭の上に被って妹と私は走りましたが、布団が重く引きずって思うように走れません。通りがかりの家に妹の布団を投げ込み、1枚の布団を2人で被って、妹の手を握って走りました。その時「屋根瓦が燃えている」と不思議に思ったことを覚えています。(後の資料によると、岡山空襲で使用された焼夷弾は油脂ガソリン黄燐が入った焼夷弾を38本束ね投下された。と記録にあったので、これかな？と、思いました)

人の流れに合流し、清心高等女学校の裏道に出た時、母と姉に会うことができホッとしました。しばらく人の流れに乗って夢中で走りました。現在の池田動物園近くの尾針神社へ逃げました。お宮の高台には多くの人々が集まり右往左往していました。ふと立ち止まって四方を見回すと、真っ赤な火の海が見えました。白っぽい煙があがり、その上空に敵機が列を作って飛んでいて、その飛行機から、しだれ花火を思わせるように焼夷弾が落ちているのが見えました。竹ひごで作ったグライダーを思わせる大きさの敵機が7～8機、北へ向いて小さくなりながら消えていきました。街の赤い火はしばらく燃え続けました。

どれくらい過ぎたのでしょうか、夜明けとなり、明るくなってきました。家の方はどんなになっているか心配でした。人々も少しずつ帰りだしたので、私たちも帰ってみることにしました。道端の家は焼け、様子がすっかり変わっていました。焼け残りがくすぶっていました。我が家のまわりはすっかり変わり家の形もありませんでした。母は「20年の生活が全部灰になってしまった。」と肩を落とし、つぶやきました。

隣の家の、身体が不自由だったおじいさんは焼死されていて、家族の方が涙を

流しながら「おじいさん、ごめんなさい。熱かったでしょう…」と手を合わせておられたのが、今も心に深く残っています。我が家は幸いに家族4人揃って助かりました。

私は当時、学徒動員で広島貯金局から疎開された貯金の原簿記入、計算等の仕事を天満屋の5階でしていました。昼間の空襲であれば地下へ避難することに決められていました。あの時、商店街の人たちは天満屋の地下に避難され、蒸し焼き状態になり全員亡くなられたと聞きました。私にとっては、空襲が夜中だったので命拾いしたことになります。西川近くの方は次々に川に飛び込み、周りの建物の燃える熱風で多くの方が亡くなられたと知りました。「街の方には黒焦げの遺体がたくさんあるぞ」などと伝わってきました。

その日、罹災（りさい）証明書をもらい、法界院駅から汽車に乗って郷里に向かいました。祖父母が暮らしていた空き家（父の実家）に落ち着きました。

しかし、その後の生活は楽ではありませんでした。親戚、知人、近所の人々に助けられながらの生活でした。米、麦、芋、野菜、芋づる入りの雑炊が毎日の食事でした。当時は、米、麦は政府に買い上げられ農家の余剰米はヤミ米と言われ、物々交換されていました。しかし、私たち戦災者には交換する物品もなく入手は困難でした。

そして8月15日の終戦を迎え、軍需工場で働く学徒動員寮生の世話をしていた父が帰り、家の中がやっと元気づきました。

空襲で大切な家族を失ったり、怪我をしたり、家を失った人たちは、その後も大変苦しい生活をしました。空襲だけでなく、戦場へ父、夫、我が子、兄弟を送り、命を捧げた人も多くありました。原爆の犠牲になったり、沖縄の恐怖の戦闘など…。戦争を知らない若い人たちへ「平和の願い」を強く強く伝えていきたいと思います。



石原節子さん

86才

私は昭和20年2月1日、17才（数え年）で広島県呉にある大竹海兵団に入隊しました。通っていた国分寺青年学校から勧めがあり、大竹海兵団の入団試験を受けたのです。

大竹海兵団には、1班が30人で、それが10班あり1分隊です。14分隊ほどありましたので4,200人程同期で入団しました。ひとつの兵舎に4分隊が入っていました。兵舎はかなりたくさんあり、部隊全員で1万4千人程いたのではないかと思います。

そこでは、軍隊生活の基本を身に着ける訓練やカッター訓練、演習などがありました。カッター訓練では宮島までカッターを漕ぐ宮島遠漕をしたり、山口県岩国市の錦帯橋まで徒歩で行軍したりしました。演習は原村に行つての訓練でしたが、私は首に大きなできものができて、休養しておくように言われましたので演習には行くことができませんでした。各班には班長がいて、班長によって厳しさが違います。中には教員をしていて体罰を全くしない班長もいました。私はカッターのロープで尻を叩かれ、内出血した血が固まるのを防ぐために尻を踏んでももらいました。私たちの班よりもっと体罰の厳しい班もありました。そこで3ヶ月の訓練を終えました。



若き日の坂手さん

昭和20年5月6日に呉警備隊に配属されました。そこには3分隊ほどあり、私は警備隊2分隊でした。30人に1人くらいは艦船部隊に入ったかもしれませんが、当時、艦船部隊に希望を出しても船がないという状況でした。

警備隊の本隊は呉海兵団ですが私が所属する派遣隊は川原石にありました。

呉市中心部を二河川（にこうがわ）が流れていて、二河峡にある二河川水源地を私たちの分隊で警備しました。昼夜問わず交代で見張りをするというものです。

私は、巡邏（じゅんら）の列で海軍上等兵曹長について行き、見張りをする任務でした。

波止場の西に吉浦巡邏控え所という休憩所があり、そこで少し休憩して汽車で吉浦駅から天応駅に行きました。駅には階級が上の兵隊が拳銃を装備し常駐していて、巡邏に対して「異常なし」と言っていました。

ある日、巡邏控え所の入口にある防火用水にボウフラがわいていたので「海水を汲んで来い」と上官に言われ、バケツを持って海岸に行き海水を汲もうとしたその時でした。ピカッ！と強く光り、ドーン！という音がして私が後ろを向くと、むくむくっときのこ雲が出ていたのです。

これは、火薬庫でも爆発したのではないかと思いました。「何事が起きたか確かめに行ってみるぞ。」と巡邏伍長に言われ汽車で天応まで行きました。天応駅にいた衛兵が「敵機が広島市に新型爆弾を落としたらしい！」と言うので、巡邏伍長と広島市に向かいました。国道に出ると、ちょうど郵便車が通りがかり、巡邏の私たちを見て止まってくれました。その郵便車が広島市に行くというので、乗せてもらいました。

詳しい場所はわかりませんが、三叉路になっているところに交番があり、その交番では、熱線で火傷だらけになり目だけ出して包帯でぐるぐる巻きになった巡査が勤務についておりました。その三叉路にボロボロのワンピースを着て髪はボサボサ、大やけどをした50歳くらいの女性が泣きながらふらふらやってきました。そこへ呉の海軍から平ぼての貨物用車が負傷者を迎えに来たので、私はその女性を抱えるようにして荷台に乗せました。

爆心地周辺で無事な人がいない中、無傷の海軍士官がやってきました。広島駅で停車中の列車に乗っていて、ちょうど鉄筋の低い建物の横だったので爆風で壊れなかったそうです。

私たちが居た三叉路から先は壊滅していて進むことができませんでしたので、負傷者を乗せた荷台に私たちも乗せてもらい帰ったのです。

後で聞いた話ですが、戦艦大和に乗船していて無事だった海軍の兵隊が呉に転勤になっていたそうです。その人たちは原子爆弾投下後の広島で死体処理の作業を命ぜられ、多くの兵がその作業中に放射能を浴び被ばくして亡くなったそうです。ちなみに、兄から聞いた話ですが、戦艦大和はトラック島に入港していた時代に魚雷を3発受けてヒビが入って傾いても穴は開かずに、呉港まで帰ってきたそうですが、大和の最後は弾薬庫をめがけて上からの集中攻撃だったそうで、その中で生き残った方々が結局、被ばくされたのでした。

昭和20年7月末の呉軍港の空襲も見ました。川原石の高い場所にいましたので敵機が爆弾を落としてはシューっと去っていく様子を見ていました。停泊中の戦艦伊勢が攻撃を受けやられてしまいましたが、倒れず大破着底しました。

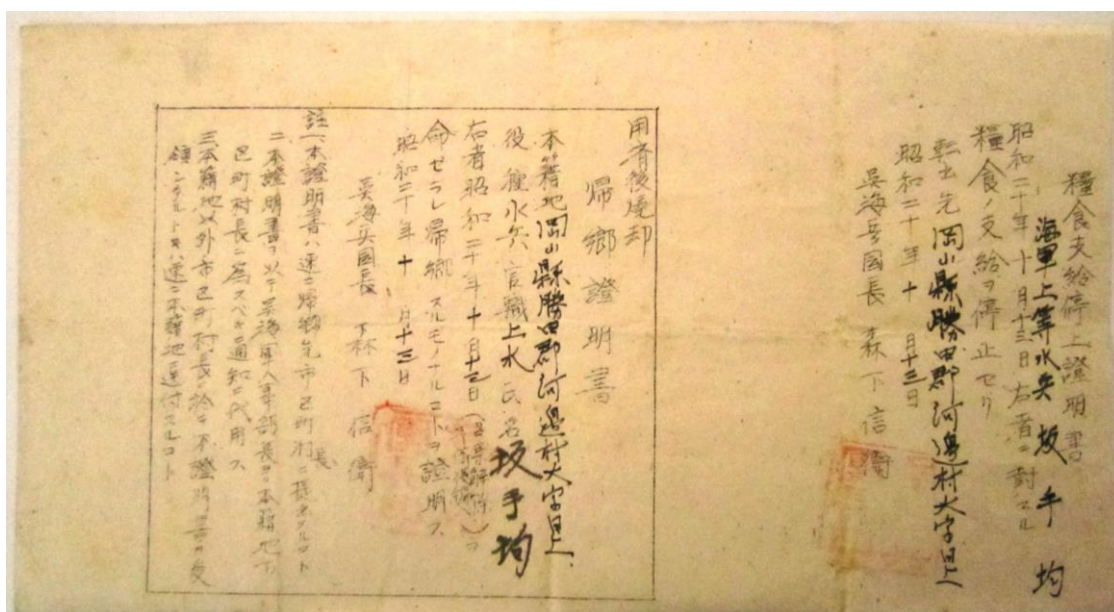
そして、終戦を迎えました。私たちの警備隊が居た建物は町に借りたものだったので返さないといけません。居場所がないので吉浦の高台の兵舎に移ることに

なりました。終戦まで知りませんでした。兵舎より高い所に西の海に向いた砲台があったのです。敵国の潜水艦が入ってきたときに撃つようになっていたそうです。

吉浦の兵舎も民間に借りていたのでまた移動し、女子挺身隊が使っていたところに数日おりました。私は隊長の食事を運ぶなどの世話をしていましたが、兄が戦死したこともあり、帰りたいと申し出ました。隊長は、「南方から引き揚げてくる兵隊に毛布を渡すなどの仕事をしてほしい」と残務整理等をするよう言われていましたが、昭和20年10月帰郷することができました。

大阪出身の帰還兵は、故郷に帰ってみたものの一面焼け野原で家は無く、家族がどこにいるかもわからない。と言ひ、部隊に戻ってきていました。その後、呉で暮らしているのでしょうか…。

私は広島で、学徒、子どもを見たことはありません。疎開していたのですが、終戦後、家族と再会できたのでしょうか…。



呉海兵団長より発行された帰郷証明書(昭和20年10月13日)

昭和20年10月に帰郷証明書を呉海兵団長より発行してもらい、津山に向かいましたが、9月の台風による水害で鉄道の一部が通っていなかったので、姫路に回って帰りました。帰ってからは実家の田畑で農作業や、ダンプに乗る仕事をしました。



坂手 均さん

86才

私は朝鮮京城府永楽町（ちょうせんけいじょうふえいらくちょう）2丁目8番地に生まれました。現在のソウルの中心部にあたり、東京でいう下町のような閑静な住宅街でした。

父はアパートを管理するかたわらアサヒガラスに勤めていて、唐津（陶器）の土を探す仕事をしていました。家は平屋建ての箱棟で広く、中庭があり一部の部屋はオンドル式（朝鮮や満州の暖房装置）でした。それは土で固めた床に油紙が幾重にも貼ってあり、拭き口より薪や石炭を炊いて床下を熱気が通り、床全体が暖まるというものです。石炭ストーブもありました。

冬はとても寒く、撒いた水がすぐ凍るので水を撒いては氷の上を滑って遊んでいました。汲み取り式のトイレは凍って積み上がってしまうため叩き折らねばなりませんでした。

私が生まれた昭和13年は、日本は中国との和平交渉が決裂し、全面戦争に突入、日本では4月に国家総動員法が公布され、だんだんと戦況が厳しくなっていく頃でした。

そのような状況から当時は日本の兵隊さんを元気づけるため、満州をはじめ各地にある日本軍の駐屯地に慰問団が派遣されていました。

慰問袋には裁縫道具、冊子、千人針を施した衣類などを入れて届けられていました。中でも心のこもった手紙などが入っていると兵隊さん同士取り合いになったと言います。

私が5歳くらいの時だったと思いますが、母に連れられ町内婦人会の慰問団の一行として、ソウル近郊にある駐屯地を訪れた時のことです。駐屯地の門を入ると、食堂のような広間があって正面には舞台がしつらえてあり、婦人会からの慰問袋の贈呈後、歌や踊りの交歓会がにぎやかに行われていました。子どもは私ひとりだったため兵隊さんに珍しがられ、ひっぱりだこで部屋に招かれ、モナカやビスケット、羊羹などを抱えきれないほどもらい、次々に抱きかかえられるので、兵舎を出るまで地に足がついていなかったのを覚えています。

その頃の記憶では、金ちゃんという韓国の友だちとよく遊んでいて、ある日金ちゃんが転んですねをすりむき家に連れて帰ると、その傷口に金ちゃんのお母さんが荒塩をすり込んで消毒したのには、子どもながらにおどろきました。

その帰りにキムチ漬けをいただき、あったかいご飯にのせてハアハア言いなが

ら食べたあの時の味は忘れられません。また幼稚園の運動会では、かけっこで転んで泣きながら保護者席にいる母の元へ飛び込んで行ったこと、2人の女性に連れられて動物園の帰りにレストランで食事をしたことなどが印象的な出来事として覚えています。

私が通った日の出小学校は、赤レンガ造りの3階建てで地下では給食のパンを焼いていました。校舎には全室スチーム暖房が通っていて、あれほど立派な小学校は今日の日本においても見当たらないくらいです。日本が朝鮮を統治した時に朝鮮の財を投じて建てられたものだと思います。

昭和19年、私が小学2年生頃から昼夜問わず頻繁に警戒警報のサイレンが鳴るようになりました。昼間警戒警報が発令されると、学校から防空頭巾を被って家路を急ぎます。歩道を走って帰っていると、警防団のおじさんにつまみあげられ道べりの防空壕に放り込まれたことがありました。空襲警報が発令されたことではなく警戒警報だけでしたがB29が数機飛んでいきました。

家では、床下の防空壕に母と隠れました。夜中に警戒警報が鳴ると窓の暗幕を引いて家の明かりが外に漏れないようにして、防空頭巾を被って床下に入りました。父は腹を決めていたのか、防空壕には入ることはありませんでした。

昼夜を問わずB29の飛来が毎日のように続き、終戦を迎えることになりました。

朝鮮が日本の領土だった期間は35年間で、明治43年8月の日韓併合から終戦までが日本の植民地になっていたのです。日本の統治が平和的なものだったら良かったのですが、そうではなかったようで、昭和20年8月の終戦、しかも敗戦という形において、現地の方の感情がむきだしになり状況が一変したのです。これは満州各地においても同じことだったと言えます。

すぐに日本人の引き揚げが始まるのですが、町内の韓国の人たちが「日本に帰っても大変だから、私たちが守ってあげるから残りなさい。」と言ってくださり、私たち一家は現地にとどまることになりました。それは父が以前から韓国の方たちに親切にしていたからでした。

終戦を機に、日の出小学校は進駐軍の駐屯地となり、当然ながら学校は閉鎖されました。日本への帰還までの間、日本人の子どもたちを寺子屋方式で有志の先生方が教育を続けてくださっていましたが、寺子屋への行き帰り、街角のあちらこちらで日本人が暴行を受けているのを目の当たりにして、子どもながら怖くて寺子屋に行くのをやめました。先生方もやがて帰国され、間もなく寺子屋は閉鎖されました。

38度線を越えて北朝鮮から京城に逃げてきた人たちが、あちこちのお寺でつかの間の休憩をされていました。皆さん着の身着のままで女性は頭を丸刈りにして、顔には黒く墨を塗って男のような恰好でした。母は衣類等を持ってお寺に炊き出しに行っていました。

終戦と同時に外地から日本への引き揚げ者は軍人が約330万人、民間人が約330万人で合せて約660万人もの人数でした。

当然、日本には飛行機は無く船での引き揚げになるのですが、船はほとんどが撃沈されていて、残る軍艦はアメリカ軍に没収されていました。満州や朝鮮では日本人が危険な目にあっていて、早期の帰還が急がれ、国がGHQに働きかけ、没収された軍艦の大砲や銃を取り払い、引き揚げ船に使わせてもらっていたのです。それでも船は足りず漁船や貨物船もかき集めて対応するのですが、各地の港では幾日も足止めを余儀なくされ、その間に多くの子どもや弱者が亡くなったのです。

ちなみに、朝鮮では約29万人の軍人と約90万人の民間人が帰還を待っていました。

京城では、日本の警察署が暴徒に襲われ拳銃がちまたに流出したため、警察の機能は失われてしまい、昼夜あちこちで銃声が聞こえ、夜には自宅の屋根の上をピストルを持った賊が通るのを見ており、その翌日には隣の日本人夫婦が二階の格子戸を破られ一晩のうちに殺害されました。

それを機に、母とともに父に日本へ帰ることを勧め、私は日本がどんな所かも知りませんでした。日本へ帰ろうと言っていました。日に日に身の危険を感じるようになり、ようやく父は重い腰を上げ、日本に帰ることにしたのです。

帰国することが決まると、家財道具を売るため母と2人で人通りの多い所で露店を開きました。お客さんは韓国人ではなくアメリカ進駐軍の軍人が多く、主に日本人形が好評でよく売れました。他の家財道具はほとんど売れることはありませんでした。

ある日帰国のため、預金を引き出しに郵便局の入口に並んでいると、その日は日本軍の航空機が最後の飛行を許され、日の丸を付けた何機もの飛行機が上空を飛んでいました。その内の1機があまりにも低く飛んでいるなと思うと、間もなく前方に黒煙が上がったのです。映画館に墜落したとの事でしたが、生きて日本に帰還しても仕方がないと、決死の飛行をされたのだと後で聞きました。

その頃には、日本人はほとんど引き揚げていて町内では私たちだけになっていました。そして、次の年のお正月を迎え、町内の韓国の方たちのおかげで餅をつ

いて過ごすことができました。

日本に帰る際には、終戦前ですと必要なものは日本に送ることができましたが、戦後は荷物は手に持てるだけと決められていました。韓国では「日本人からは一切買うな」と国から指令が出ていたので、家屋や家財道具は置き去りにするしかなかったのです。もうひとつは現金で、預金の送金ができず現金は1人1,000円までと日本政府が決めていて、それ以上は没収されることになっていたのです。

これまでに引き上げた方が、お札を女性の着物の襟に縫い込んだり、靴底や荷物の底に隠したりと、あの手この手でお金を持ち帰っていたのが検査で見破られるようになり、基準以上の現金の持ち帰りは厳しくなっていました。

母はお金のことが心配で、父の反対を押し切ってある知り合いから紹介された医者にくらかを預けました。その医者は博多の港で引き揚げ者の検疫所に従事していて、そこで渡してあげるから…、という話だったのです。

残りのお金は何冊かの私の絵本の中に貼り合わせてバスケットの中に入れることになりました。

昭和21年2月、これが日本に帰還する最後の引き揚げ列車で、いよいよ京城を発つ日が来ました。両親と私の3人で持てるだけの荷物を町内の方がリヤカーに積んでソウル駅まで運んでくれました。荷物は背丈ほどの柳行李（やなぎごうり）と、その上に毛布を1枚くくりつけ父が背負いました。母はリュックと両手に手提げ袋を、私はリュックとバスケット、それに塩の袋（なぜか日本には塩がないのだとか）を持ちました。

列車は貨物車両が65両、蒸気機関車2両からなるもので、後方より1班2班…となっていて私たちは後ろから5両目5班でした。私たちが乗った車両は小さく屋根のある郵便車両で中央の扉が両開きになるものでした。その車両に7世帯20人ほどが床に腰を下ろすという状態でした。京城の都会に住んでいた私は、電車は見慣れていましたが蒸気機関車を見るのは初めてで珍しく、気になっていたのも、送って下さった町内の方との別れの状況は覚えていません。

列車は定時に出発し、夕刻にはプサンに到着し、博多行きの船に乗船できることになっていました。数時間後、田園の中を走っていると皆が列車の上に銃を持った賊がいると騒ぎだしました。賊のその影が田園に写っていて心配になったのです。私たちの車両は屋根があり格子のついた窓だったので侵入の心配はありませんでしたが、他の車両は木材や家畜専用の車両で屋根が無く襲われる心配があったのです。

しばらく走っていると峠にさしかかったのか列車の速度が落ち、ふと見ると後

ろの車両の連結部分が外され4両が消えていて、私たちの車両が一番後ろになっていました。外された4両の車両がどうなったのかはわかりません。

すると今度は、長いトンネルの中で列車が停車し、2両の蒸気機関車の煤煙が充満し息苦しくなり毛布を被ったりタオルを当てたりしてしのぎました。屋根の無い車両の人たちは大変だったのです。

やっと列車は動きだしましたが、トンネルを出た所で再び停車し、いっこうに動きません。なんだろうと思っていると、各車両の班長が「機関士がお金を出さないと列車を動かさないと言っている」と言い、皆でお金を集めて機関士に渡すと、列車は動きだしました。

そのようなことで、プサンに到着した時には船は出港した後でした。その日はプサン港の倉庫で一夜を過ごすことになりました。倉庫に行く途中、私の持っていた塩の袋が重たく捨ててしまいました。

倉庫に向かって歩いている時、それは起きました。何げなく私が石ころを蹴ったのが通りすがりの韓国人の老人の足に当たってしまったのです。その老人はふりむきざまにわたしを睨んで動こうとしないので私も動けず、まるでねずみが猫に睨まれたように動きがとれず、子どもの私でさえ殺気を感じました。父が「一、早く来い」と呼んでくれてようやく動きがとれたのでした。

夜が明け、港で荷物の検査を受けました。船着き場のコンクリートの上に荷物を広げ、着ている服や着物も脱いで検査官に全部調べられるのです。幸い、私のバスケットは調べられることはありませんでした。父の財布に100円札があり、聖徳太子が笏（しゃく）を持っている絵が珍しかったようで、進駐軍の検査官（帽子にMPとある）に、これを「もらえないか」と言われ、あげていました。

その後、頭から足の先までDDTをかけられ真っ白になりながら船に向かいました。船は小さい石炭船で、船底の畳の間に落ち着きました。玄界灘を渡るときには船が小さいため、かなり揺れて船酔いでしんどい思いをしました。

午後には無事博多港に着き、ここでもDDT（水際対策、しらみ通さず作戦）をふりかけられ1人に1袋ずつカンパンをもらいました。

ところで、母がお金を預けた医者ですがとうとう見当たらず、そのような人は検疫所にはいない、ということでした。結局だまされていたのだとわかり、父の予想通りになってしまったのでした。

手続きが終わると、始発の博多駅から客車に乗りました。車両に乗客はほとんどおらず、なぜか中央部の席に親子3人座りました。これが後で大変なことになるろうとは思ってもよりませんでした。博多を出て間もなく下関に着くと、帰還した

多くの兵隊さんが乗り込んでこれ、またたく間に車内は身動きが取れない状態になり、途中私がトイレに行きたくなったのですが、子どもの私では行けず困っていると、兵隊さんが私を抱き上げ兵隊さんの頭の上を手渡しでトイレまで送ってくれました。次の駅で窓から席に入れてもらったのです。

兵隊さんから次々とカンパンをいただき、いっぱいになりました。ふと、立っている兵隊さんの会話が耳に入りました。「おれは汽車には乗ったけど、どこに帰ろうか。」と言うと、もう一人の兵隊さんが「わしの所に来い、東北だけど少しばかりの田んぼがあるから、なんとかなるさ。」と、その兵隊さんの友情が私の心に強く残っています。

やっと、父の故郷津山に到着し、知り合いの大きな農家に身を寄せることになり、その家の離れに住まわせてもらうことになりました。間もなく田植えの時期を迎え7歳の私でも一人前の手伝いができたようで、休憩の時間に田んぼの畦(あぜ)に届けられる、ぼた餅を腹いっぱい食べられたのはこの上ない喜びでした。庭には、鶏、あひる、やぎ、牛がいて都会暮らしだった私にはすべてが珍しく楽しい毎日でした。

当時、引き揚げ者は着の身着のままで帰ってきているので「引き揚げ者にはかまうな」と、ちまたではとりざたされていて、田植えが終わると間もなく農家を出ることになり、同じ町内の一人暮らしのおばあさんの家の一間を使わせてもらうことになり、以来10有余年住むことができました。

京城では小学2年の途中で引き揚げて来ているため、日本でも小学2年生をやリ直すことになり、2回目の勉強なのでその年の通知表は満点でした。

津山に来て1年ほどたったころ、手足のあちこちに膿ができてなかなか治らず、薬を塗って包帯を巻いていました。ソウルの水から日本の水に慣れるまでにできるようで2年あまり続き大変な思いをしました。学校ではあだ名が、出物株式会社と言われていたくらいです。

家の近くに国道53号線があり遊んでいた時のことです。進駐軍のジープが止まって、チョコレートやガムを投げてくれました。私はチョコレートをもらい、薄赤く厚みがあってあっさりした味でとてもおいしくて、あの味は日本にはなく今でも忘れられない味です。後に、昔の記録映画の中で日本の子どもがジープを追いかけて進駐軍にチョコレートをねだっている映像を見た時、当時の私も同じことをしていたのだなあと懐かしく思いました。

その頃の私はウサギを飼っていて、多いときには20匹ほどいて、餌やりや掃除が日課で学校から帰ると餌とりに出かけていました。ウサギは大きく育てて肉

屋さんに買ってもらい、学用品代の足しにしました。

近所はほとんどが農家で、同級生の家の手伝いをしては小麦や野菜をもらったり、お風呂をよばれたりすることもありました。

小学校の高学年になると、夏休みにはアルバイトをしました。小学生のアルバイトは禁止されていたようですが「あの家の子は…」と皆さんが目をかけて下さり、5年生の夏休みは卵屋さんで、農家から買い付けてきた鶏の卵をきれいに洗う作業をしました。6年生の夏休みは農協で農家から集められた菜種の実を天日干しする作業で、いずれも近所の方々がお世話してくださいました。

中学校にはわらぞうりで登校しており、お金が無かったのでしょうか、修学旅行に行くことはありませんでしたが、3年団の修学旅行出発の日、皆が校庭に並んでいるのを2階の教室から見送っていると、校長先生が「一緒に行こう早く降りて来い」と声をかけて下さり、そのことがとても嬉しかったことを忘れることはありません。

中学3年の3学期そろそろ進路を決める頃、父より「大工か左官にでもなって食わしてくれ」と言われ、それまで父の年齢を考えてもみませんでした。父はよく私のことを62の子だと自慢していて、その時は80歳近くになっていたのです。

担任の先生に事情を話すと、夜間高校と工場をお世話して下さい、働きながら高校に行きました。工場の社長ご夫妻が学業に配慮をしてくださったおかげで、4年間無遅刻、無欠席、無早退で卒業でき、翌日地元紙に「蛍雪の功」として大きく掲載され大変感謝しています。

卒業後は福祉の道一筋40年（地域福祉活動17年、社会福祉施設23年）第一線における社会福祉8法の各分野にたずさわることができました。

昭和43年に勤労者住宅団地の一戸建て住宅をローンで購入、長い間戸籍謄本の本籍の地番が他人の家になっていて、ようやく本籍、現住所が一つになり、終の棲家を持つことができました。ローン返済が終わったのは平成7年で戦後引き揚げてきて50年、半世紀かけての私の戦後が終わり日本の地に根を下ろすことができましたのです。

今日があるのは、これまで多くの方々の支えによるもので、退職後はお世話になった方々に少しでも恩返しができたらとボランティア活動をしています。

私たち家族は敗戦からの引き揚げで多くのものを失い、生活は一変し何もない状態でしたが、ひたすら前を向いて歩んできました。

私の心の支えになっていたのは、戦後ゼロから出発して今日に至っていて、ど

んなに不幸になってもゼロより不幸になることはない、という安心感と希望からでした。その経験は再びゼロに陥る事があっても、うろたえる事なく生きていける自信と安心を得ることができ何よりの財産だと思っています。

戦争は悲惨です。得るものは何也没有什么。情勢に流されることなく、正しい目で物事を見つめ考えていくことが必要です。



大野木 一さん
78才

河本震太郎さん

平成28年3月18日取材

私は、勝北町で生まれ、父親が軍属として先に中国へ渡り河北省石門（せきもん）市（現在の石家荘市）で勤務していたため、昭和16年に母親と妹の3人で石門市へ行きました。当時、私は広戸小学校へ通う小学2年生でした。

石門市は大きな町で、日本人の建てた大きな石門神社や、道に花崗岩が敷いてある立派な商店街や、映画館もあり、日本人も多く住んでいました。日本人の学校は、小学校、工業学校（高校）、女学校があり、私はその小学校へ通い、その後工業学校へ通っていました。学校の先生は、日本人でした。工業学校では、週に1回中国語の勉強があり、中国人の先生が教えに来られていました。英語は、敵国（アメリカ・イギリス）の言葉なので勉強させてもらえませんでした。

石門市での生活は、不自由することなく安全に暮らせました。

津山市からも、剣道の先生の小泉さん（現在でも小泉旗争奪剣道大会が開催されています）が士官として来られていて、家によく訪ねて来られました。他にも数名の津山市出身の方が石門市に住んでいました。

しかし、終戦前には激しい空襲や、八路軍（中国共産党のゲリラ）が町の中に民間人の格好をして入っているの、拉致されかけることもありました。

終戦になって分かったことですが、八路軍の中には日本の兵隊だった人もかなり入っていました。捕らわれた人が「奥の方で三味線の音が聞こえていた。」と、

話をしていました。私の先輩も終戦になった時点で八路軍に行った人がいました。八路軍に入ると尉官になれるということでした。

私たちも、工業学校で銃の持ち方や、撃ち方や、匍匐（ほふく）前進などの軍事教練を受けていて訓練は厳しいものでした。学校の中には、攻めてこられた時のために兵器庫もあり、終戦前には空襲があつて勉強どころではありませんでした。

家に帰っていた時、大空襲がありました。1回目の空襲は、B 2 9による焼夷弾の空襲でした。B 2 9が低空で飛んできました。当時は日本の軍隊も弱体化していて、高射砲や弾がなく山砲を上に向けて使っていたので、飛行機が通過した後に玉が破裂する状態でした。こんなことで本当に戦争に勝てるのか不安になりました。中国の家は木造ではなく、泥を固めたレンガ造りの土の家が多かったので、焼夷弾では燃えませんでした。1回目の空襲では被害は少なかったのですが、2回目はものすごい数の爆弾を落とされて、何もかも吹き飛ばされてしまいました。私は防空壕に入っていたのですが、爆風でやられて、出てみると隣にいた人が亡くなっていました。私は、命拾いしました。

3回くらい爆撃に遭いました。私たちは、兵隊と同じように扱われていました。石門駅に新兵さんが列車で到着した時に、敵が情報をつかんでおり、新兵が列車から下りるとP 5 1 戦闘機とかグラマンが航空母艦からではないかと思うのですが、飛んできて機銃掃射や爆撃を行い、新兵たちが次々と倒されていきました。ほとんどの新兵がやられてしまい、その死体の処理や負傷した人たちを救護するよう、私たちの学校に依頼があり急いで行きました。それはもう地獄絵のように悲惨な状態でした。新兵たちの装備を見て、物資のなさを感じ日本は負けるのではと思いました。新兵たちの体がばらばらになった無残な姿を見たとき、怖くて初めは手が出せませんでした。教官の命令で担架に乗せたり、車に積んだりという作業を行いました。それはもう言葉では言い表せません。その惨状を見た私は、もう絶対戦争をしてはいけないと思いました。

爆撃に遭った後は、爆風で飛ばされた馬の死骸や、泥の家が崩れ電柱の上まで泥がたまり、電線をまたいで歩くという想像のつかないようなことになっていました。死人の上を歩いて通らないといけないこともあり大変でした。

終戦になった時に、各家庭に手りゅう弾が1個ずつ配られました。もう日本に帰れないかもしれないので、帰れない場合はこれで自決しなさいという意味でした。防空壕が家の塀の中にあつたので、その中で家族や隣近所の人を呼んで手りゅう弾を爆発させればみんな死ぬというものでした。日本に帰れないことは覚

悟していましたし、何かあったら死のうという覚悟もしていましたが、数ヶ月して捕虜の収容所に入ることになりました。日本が戦争で負けたので、民間人も捕虜になったのです。

捕虜収容所に入って1年余りを過ごしました。その時の笑い話になりますが、収容所に入った日に食卓に赤飯のような色でご飯が盛ってあったので、赤飯で祝ってくれるかと思って席につくと、ご飯はコーリャン飯でした。コーリャンはモロコシの別名です。それを炊くと赤飯のような色がつくのです。コーリャン飯は、麦飯よりもぞもぞして、とても食べられるものではありませんでした。収容所では、捕虜なので仕方のないことでした。収容所には軍人さんや、看護婦さんや、民間人が300人ぐらい収容されていました。私の父が中国の人へ親切にしていたので、「困ったことがあれば必要な物を持って来てあげるから。」と言って5、6人が何回も収容所へ尋ねて来てくれました。強盗に入られて、何もかも根こそぎ盗られた満州鉄道の人がありました。その人たちが気の毒なので、父は「引揚げのだから家財道具など要る物があったら持って帰りなさい。」と言って持って帰ってもらいました。

数ヶ月が経ち、日本に帰れることになりとてもうれしかったです。若い看護婦さんも収容所に入っていました。みんな頭を丸刈りにしてズボンをはいて外見は男の様な格好で汽車に乗せられていました。

私たちは石門駅から無蓋車(屋根のない貨物車)に乗せられて北京まで行って、そこから天津の大沽(タークー)の港へ行き、病院船に乗せられ博多を目指しました。

大沽から博多まで1週間ほどかかりますが、船が日本へ近づいてきた時、忘れられない出来事がありました。船には軍人さんも乗っており、20人ほどの若い兵隊が少し年上の兵隊を甲板に引きずり出して、海に放り込むと言っていました。話を聞いていると、年上の兵隊は上司で中隊長ではなかったかと思います。やはり厳しかったらしく、若い兵隊の同輩や友人たちが、その人の指示が悪かったり先に行かされたりして犠牲になったので「許さない、日本に帰さない。」と言って、年上の兵隊を海に放り込もうとしていたのです。そこへ、一等航海士が出てこられて「ここは船の中だから私に責任がある。私の顔に免じてくれ。同じ同胞ではないのか、ここまで命拾いして帰ってきているのだからみんな助け合わないといけない。」と説得していました。若い兵隊たちは元気があったので、長時間説得をされてやっと納得し、解決しました。

乗っていた船が病院船なので、玄界灘で海が荒れて、座ってられないほど船

が揺れたため、毎日、何人も亡くなっていきました。最初に亡くなった人は、魚のえさにならないよう梱包をされおもりを付け、ゆっくり成仏できるように海中に沈められました。初めのころは一等航海士が敬礼して汽笛をならし丁寧に水葬をしていましたが、大勢亡くなるので梱包する物やおもりがなくなり、こもで包んで切った錨を付けて沈められていました。最後は錨もなくなり水葬しても浮くので、大きな魚が群れで船の後をついてきました。そういう情景を見て情けないなと思いました。

博多港へは家族みんな元気で何とか到着できました。博多駅では、麦わらで巻いた鳴門巻きかまぼこを食べましたが、今でも忘れられない懐かしい味でした。この時、私は心から「生きていてよかった」と思うとともに、私の“大東亜戦争”が終わったことを実感したのでした。

今思えばいろいろと苦労しましたが、自分の人生はよかったと思います。

最後に伝えたいことがあります。戦争は殺し合いだということです。殺さないと殺されるのですから、戦争はとてもむごいものです。やはり戦争にならないように考えていかなければいけません。最近ではテロなどがありますが、かわいそうなことだと思います。人間同士が殺し合わなくても話し合いでなんとかならないものかと思います。戦争はみんなが苦しむものです。絶対にしてはならないのです。



河本震太郎さん

85才

フィリピンで戦死した父、野田 清が家族に送った便り

私の父、野田清は明治45年1月6日に津山市一方で生まれました。両親は父が生まれてすぐ病気で亡くなったので、祖父母に育てられました。

津山中学校卒業後、広島高等工業専門学校電気科（現広島大学工学部）を卒業、現中国電力に入社し、電気技士として久田発電所などの建設や三井造船所の配電の仕事をしており、岡山支店に勤務していましたが、昭和18年7月広島本店勤務となりました。

私の母、登美子は大正2年1月5日に美作市林野で生まれました。林野高等女学校卒業後、昭和10年1月31日に父と結婚しました。そして、私が昭和10年12月24日に、長女暢子が昭和14年9月16日に、次男宏之が昭和18年11月6日に生まれ2男1女に恵まれました。父が召集されたのは、宏之が生まれて3ヶ月後の事でした。

父は自分が一人っ子で両親を早く亡くしたこともあり、妻と子どもをととても大切にしていました。父の転勤先が広島に決まり、私の小学校入学に合わせて家族も一緒に広島に住むことを考えていましたが、昭和19年1月に召集されました。

昭和16年12月9日 岡山から津山の祖父母へ

拝啓 大分寒くなってきました。登喜夫叔父様と登様が来られ（登喜夫:祖父の弟）ご多忙であつたでしょう。

お祖父さんの弱って居られるのを叔父さんは驚かれたでしょう。

8日の日の出前から日本はアメリカを攻撃しています。イギリス領のホンコン、シンガポールも攻撃しています。

今度は、支那を相手の戦争とは違い、心の引き締まる思いがします。

シンガポールを取るには、数万人の死者が出ると思います。私も何時召集されるかわかりません。この戦争に負けるか又は攻撃ができないほど日本が弱ったなら、日本は最後です。5年も10年も続くかもしれない大戦争となりますが、苦しい思いをしても勝たなければなりません。

このため、会社の仕事也多忙となります。正月が休めないかもしれません。

ラジオが聞きたいようであれば、1台買って帰ります。8日以後、ラジオは雑音が多く聞きにくいですが、戦争の様子を知るために、誰も彼も買いたがって

会社へ申し込んできます。

朝は沢山の霜が置く様になり、今日も雨が冷たく、子供も炬燵に入ります。

寒さの折自愛なさいませ。

祖父母様

清

昭和18年6月30日 広島から家族へ（広島転勤直後、ハガキ）

午後4時半広島に着き、西白島の下宿まで来ました。西日のあたる2階で大変暑そうです。荷物は着いていましたので、早速出して今やっと落ち着きました。遠くへ来てみると、康之の負傷のことが気になります。何とか早くよくせねばなりません。今日は遅くなったので、大好きな風呂もやめて早く寝ます。康之、暢子によろしく。

御飯4杯はあります。魚のフライ、卵の汁、胡瓜煮と胡瓜の漬物ができました。これなら大丈夫です。

6月30日午後6時半 広島市西白島15-1 野田清

昭和18年7月1日 広島から家族へ（ハガキ）

今日は、朝から雨になりました。レインコートを持ってこなかったのが、濡れました。康之を病院に連れて行くのに困ったでしょう。暢子も留守をするのによい子でしたか。今日は早く帰って銭湯へ行きましたが、思っていたより綺麗で、人も少なく下宿に近くてよい。宿の食事でも会社の食事でもよろしく、之は安心ですが、子供達が居ないので、何だか気ぬけの状態です。宿から会社まで30分以上かかり、電車はいっぱいです。

昭和18年7月2日 広島から長男へ（ハガキ）

康之ちゃん、足の傷はどんなですか、お父さんは心配しています。病院に行くのにどうしていますか。お母さんにおんぶしてもらっていますか。毎日、雨がふって大へんですね。べんきょうをしていますか。学校へいけないので、皆にまけないように、お母さんに教えてもらいなさい。それから暢子となかよくしなさい。お母さん、暢子によろしく。おたよりをください。まっています。

昭和18年8月11日 広島より津山の家族へ

本日は手紙を有難う。金曜日津山に帰る予定でしたが、通信所で会議があるので帰れなくなりました。土曜の午後は休めるが日曜に出て会議の資料を一人で

作らねばなりません。

別れて淋しいのは自然の心であるが、これが人生らしい。満ちたりるということではない。体の具合で心細くなっているのしょうから、本でも読む必要があります。召集は近くあると思わなければいけません。この状況が来年まで続くようなら、若者は皆出るようになるでしょう。

我々の安楽を考えるよりも、康之や暢子や行く先に出来る子供のことを考えねばなりません。

津山ではおぼたを作りましたか。お盆がきますが、祖父さんの位牌を立派に祭ってください。

何もばたばたすることはないから、ゆったりとかまえて夏を過ごしなさい。康之らも相当にはやっていくでしょう。祖母さんによろしく。

昭和18年9月18日 広島より津山の家族へ

拝啓 本家の祖母様が亡くなられた由、林野から帰って御疲れは出ませんでしたか。中村・田口両君とも出征と聞いて私も緊張を覚えます。

米英の反攻にまかせている状態ですが、現に兵器・弾薬は相当数蓄積されてある様子ですから、ソ連と破たんなくいけば、インド・満州に攻撃を加えるのも近いと思い、その時は召集があるでしょう。

近く会社では50名程度の徴用に応じなければいけません。中国・九州の各県下の勤務だそうで、場合によっては外地勤務のよし、配電会社技術員も今のような務めは出来なくなるでしょう。

貴方は、康之・暢子を立派に育て、祖母と家を守り、昔時の立派な武士の妻のようにしなければなりません。

兄、祖父より受け、子孫につぐものは心のみ、大和魂・武士道のみ、それが人の尊さです。吾々は、迷わざる心を持ちましょう。

夜が長くなりました。康之にも読書をさせなさい。課外読物を大声で読ませて、面白く聞いてやりなさい。読ませるときは机を出してやり、電灯の先を適当にしてやりなさい。近眼にしない必要があります。

それから、人が来たとか、物音がしたとか小心落ち着かないのはいけません。子供にうつります。

明日は会社に行って一日仕事をしようと思います。

昭和18年11月27日 広島から家族へ（次男宏之が生まれて11日後）

拝啓 手紙を見ました。今日便りがなければ病気が悪いのだろうから、今夜の夜行で帰ろうと思っていました。少しは良いようで何よりです。ミルクは光井病院へいってみなかったのですか。乳の出は食べることも必要だが、気分の影響が多いのですから、心をしっかりとて朗らかに楽しくすごさねばなりません。餅ができるとうれしい。私は前からこれが気になっていました。餅を食べてうんと乳を出しなさい。私が居れば、山羊や鯉など都合できるのに残念です。光井へ歩いたのに、さわりはしませんでしたか。銀行にも行ったようですが、こちらから金を送ればよかったですね。

宏之の黄疸は治りましたか。康之は勉強していますか。何とか面白く進んでるように考えてやらなければなりません。絵を描かせたり、課外の本も読ませるとよろしい。暢子は〇〇へ行くようですが、つまらないことを学ばせないように指導してやり毎日行くのも考えものです。

12月からは病人用の魚も卵も入らなくなるようですから、何か栄養になるものをさがしなさい。年寄りが居り子供が3人になったので、多忙ですが落ち着いてうまくやっていかなければなりません。戦争がなければ、女中をおくこともできるのですが、忙しい中に閑を見いだして修養をするのが立派な女です。康之ちゃん、がんばっていますか。朝寒いでしょうが寒そうなかっこうをしてはいけません。「米英をうちてしやまん」と言うようなふうでいなさい。

昭和18年12月17日 広島から家族へ

宏之に注意せねばなりません。脚気かもしれないから、貴方が薬を飲ませねばなりません。それから、少しでもミルクが手に入るかもしれないから、市役所へ電話をしてみなさい。

祖母さんは、すっかりよくなったようですが、無理な食べ方をしないように注意しなければなりません。康之の手紙をみると益々しっかりして来ることが判ります。24日に帰りますが、2、3日しか休めません。会社も改革でどんなことになるかわかりません。

ノブコちゃん。

サムクテモゲンキデスカ。モウスコシデ正月ガキテ、6ツニナレマスネ。

ヨクアソビ、ヨクオテツダイヲシテクダサイ。オバアサンニヨロシク。

サヤウナラ

昭和18年12月19日 長男康之から広島之父へ（満7歳）

おとうさん。お手紙ありがとうございます。しふじを書いております。読方もしております。兵隊さんの絵葉書をありがとうございます。てんらんかいはおもしろいのがあったでしょう。宏之は耳のおいしゃに行きました。

もうすぐお正月なので、おじいさんは神だなをおかざりになりました。

新しいしめなわをはったり、さかきをあげたりなさいました。小さい三方に白い紙とうらじろをしいて、鏡餅をのせてお供えになりました。おみきもお供えになりました。それからおざしきの床の間にも鏡餅をおかざりになりました。

「さあこれでお正月がきてもよいぞ」とおっしゃいました。

夕方、神だなにあかりをあげて、みんなで拝みました。小さい妹が神さまお喜びだねといいました。お父さん元気でいてください。

康之

昭和19年1月15日 広島から家族へ

今朝から耐寒運動と言うて、会社では午前8時半よりラジオ体操をした後、2キロを走破します。第1日目を参加しましたがなかなか楽ではない。

昨日小包が来ると待っていたが、今日も来ない。餅とわかって取られたのでしよう。苦心して集めたものを取られたのでは何にもならない。私は食べなくても別に欲しいとは思わない。ご飯がしっかり食べられます。

昨今、水がなくて電力が少なく、石炭も数か月すれば尽きると言っています。税金が上がったから大分こたえるでしょう。毎月所得税を56円取られ、賞与月には100円取られます。衣料切符が廃止となるということで買い急いでいる人がいます。

明日は日曜日ですが、会社に行って仕事をします。会社では湯沸伝熱を足に巻くことができます。

康之ちゃん、14日の朝は、御飾りをおろしてとんどをしたかね。書初めもとんどしましたか。おばあさんがとんどの灰で、ひたいに一の字を書かれたでしょう。広島では毎日兵隊さんがふえているようです。寒いのにえんしゅうをしています。康之ちゃんもしっかり運動して、しっかり勉強しなさい。

さようなら

昭和19年1月28日 広島からの最後の手紙(この後召集されたと思われる)

康之ちゃん、何をしているかね。飛行機は組み立てたか。お父さんは毎朝8時20分までに会社へ行って、耐寒運動のかけあしをしています。2キロメートルほど走ると暖かくなります。此の寒いのに夜、練兵場で機関銃を撃っている兵隊さんがいます。お父さんはこたつにあたって兵隊さんをごくろうだなと思っています。

ノブコチャン。ヨクアソンデイマスカ。イマガイチバンサムイトキデス。

カゼヲヒカナイヨウニキヲツケナサイ。

オニイチャンニ、アタマニオクスリヲツケルヤウ イッテクダサイ。

オバアサンニヨロシク。

サヤウナラ

1月28日夜9時

このあと、父は姫路中隊第46部隊酒井隊に入隊したようです。軍隊からの手紙は、検閲があるため書けないことが多いのです。そのため、母といろいろな約束をしていたようです。

行き先がわかった時、近所の人の名前で伝えることにしていたのです。6月21日付のハガキに“広一さん”という名前が出てきますが、これはフィリッピンに行くことを示しています。また、ハガキの右上から斜めに伝えたいことを記入することにしていました。何枚かのハガキにこれが見られます。文を作るうえで苦労したようで、文章がおかしいところがあります。6月21日には「まだひめじにいる」と書いていて、7月25日には「マニラ南100キロ」と伝えてきています。家庭に様子を伝え、心配させまいとしていたことが判ります。

(次のページに続く)

朝鮮	(岩野)	ホルネオ	(泰市)
瑞河	(寿平)	フリッピン	(広一)
北支	(穂)	セレベス	(お岩)
中支	(岩口)	モルッカ	(和雄)
南支	(河本)	ニューギニア	(郷)
佛印	(遠)	南太平洋	(中山)
タイ	(里瀬)	南洋群島	(妹尾)
マライ	(戸服)	樺太	(奥津)
ビルマ	(林野)	千島	(春子)
インド	(佐田)		
スマトラ	(山田)		
ジャバ	(井上)		

通信要領 父が行き先や状況を母に知らせるために文章の約束事を書いたもの

昭和19年4月23日 姫路中部第46部隊酒井隊より家族へ

拝啓 皆元気な由にて安心しました。宏之がいるので中鉄（現津山線）に乗るのは考えものです。面会が是非必要ならば、日曜の午後は許されるかもしれません。面会の件、高田隊中隊長殿へ貴方より書面にて願出て許可を得てからでないといけないと思う。だんだん暖かくなり、子供達もよく遊んでいることと思います。当方、快適に過ごしていますから、御安心下さい。 敬具

昭和19年6月16日

急なことで、気も落ち着かず、本朝は早くから特に疲れた事でしょう。気を落とさず、祖母様や子供達のために、朗らかに我が家のために強く生きなければなりません。警戒中にて、食事もなく少し早いが付近のお宅の芝生で、武司さんとちょっと食事をしてむすびを食べています。1時間ほどいて隊に入ります。皆、体に気を付けなさい。宏之は特に注意して下さい。では皆によろしく。

昭和19年6月21日

拝啓 暑気厳しくなりましたが、皆御変わりはありませんか。
いまは酒井隊にゐて、身体は至極健康だから御安心下さい。お天気が続いて夜
がよくひえるから、子供達に充分気を付けて下さい。私はよくめがかすんで困
ってゐたが、よくなった。おぢいさんのお墓をよく掃除しなさい。広一さんは、
雨がなく田植が出来ないので心配してゐるでせう。何れ梅雨となり、広一さん
はほっとするでせうが、私共は少し弱ります。皆注意して御過ごしなさい。
六月二十一日 敬白

斜めに「まだひめじ」と文字が並んでいる。「広一さん」という名があるので、行き先はフィリッピン。「まだ姫路に居るが、フィリッピンに行くことが決まった」ということがわかる。

拝啓 暑気厳しくなりましたが、皆御変わりはありませんか。

いまは酒井隊にゐて、身体は至極健康だから御安心下さい。お天気が続いて夜
がよくひえるから、子供達に充分気を付けて下さい。私はよくめがかすんで困
ってゐたが、よくなった。おぢいさんのお墓をよく掃除しなさい。広一さんは、
雨がなく田植が出来ないので心配してゐるでせう。何れ梅雨となり、広一さん
はほっとするでせうが、私共は少し弱ります。皆注意して御過ごしなさい。

六月二十一日

敬白

昭和19年6月24日

お蔭で皆様大丈夫ですか。好天気続き、何時になったら雨になるのか近隣の人
は待ちわびているでしょう。田植え時の様子が思はれる。お祖母様は気を落
してないか心配である。宏之の顔にでたものの原因は判りましたか、よく注意
しなければなりません。妹尾保さんらは帰られましたか。康之はしっかりやら
なければならぬ。よくわかっていますか。当方至極元気ですから安心してくだ
さい。皆様明朗に過ごしなさい。ではさようなら
六月二十四日

出発が「何時かわからぬ」と示している。

拝啓 皆様大丈夫ですか。好天気続き、何時になったら雨になるのか近隣の人
は待ちわびているでしょう。田植え時の様子が思はれる。お祖母様は気を落
してないか心配である。宏之の顔にでたものの原因は判りましたか、よく注意
しなければなりません。妹尾保さんらは帰られましたか。康之はしっかりやら
なければならぬ。よくわかっていますか。当方至極元気ですから安心してくだ
さい。皆様明朗に過ごしなさい。ではさようなら
六月二十四日

昭和19年7月25日

相方暑氣激しくなりまして、先には江見君の配慮により、かしわもちにありついて何よりでした。あの時、薬を種々頂いていたから心丈夫でしたが、別に飲む程のこともなく、元気にて当地に着きました。南方も雨季があり、今は内地の夏程の暑さで梅雨のような雨があります。十五百突然広一さんに会ひました。何分沢山の人の内ですから、会へるときがあるかどうか心配しましたが、よく会えたものです。当分一所に居るだらうと思ひます。子供らも御祖母様も、暑氣あたりなく過ごしていますか。トマトも沢山出来てゐるでせうね。当地は果実が沢山あり、マンゴーは大変うまい、然し戦争とは言ひながら物価が高いのには驚く。指大のバナナが四十銭だ。皆心を一つにして気軽に楽しく過ごしなさい。康之は特に伸びのびと勉強させなさい。自転車にも乗れだし、習字もやっているでせう。万事気を付けて過ごしなさい。自分も体に気を付けて、病気にならないようにしている。

敬白

フィリピンマニラより軍事郵便で

比島派遣軍威第10671部隊笠間隊

斜めに「マニラ南100キロ」と伝えている。

拝啓 暑氣はげしくなりましたが、皆々さま御変りありませんか。先には江見君の配慮により、かしわもちにありついて何よりでした。あの時、薬を種々頂いていたから心丈夫でしたが、別に飲む程のこともなく、元気にて当地に着きました。南方も雨季があり、今は内地の夏程の暑さで梅雨のような雨があります。十五百突然広一さんに会ひました。何分沢山の人の内ですから、会へるときがあるかどうか心配しましたが、よく会えたものです。当分一所に居るだらうと思ひます。子供らも御祖母様も、暑氣あたりなく過ごしていますか。トマトも沢山出来てゐるでせうね。当地は果実が沢山あり、マンゴーは大変うまい、然し戦争とは言ひながら物価が高いのには驚く。指大のバナナが四十銭だ。皆心を一つにして気軽に楽しく過ごしなさい。康之は特に伸びのびと勉強させなさい。自転車にも乗れだし、習字もやっているでせう。万事気を付けて過ごしなさい。自分も体に気を付けて、病気にならないようにしている。

七月二十五日

敬白

病つたうの便を相入しき。此はまゝ由安んじす。病人の難
 孔透とは好むすかえ。また其の傷かしこめせう。これ
 には理科を自明させておます。其友がある様です。如研究心を養ふ
 ために、室内に於て常に注意して下さる。
 幸に健康で、上して居ります。心から安んじさう。貴女の生活にも順中
 也年頃から、上してもらへば、心掛けを下さう。
 此方方には柳みが多い。此方林は安んじさう。果凡が葉をゆすり
 すす夜は滑り飛んである。柳みの中にある果汁は思つた程いれ
 なう。よふ飲物です。茹みがある。電でも毎朝西側の畑に子供と共
 り取つてある。柳を思ひ込めます。パイタルは食べた食べさせてやうな
 忘れ君にも送ら来す。たね松屋も去くへ行き、心配しめておくれう。
 昔何れかを付けてくること。一番だ。自分も胃腸の調子はよく、柳丸
 を取るか。うしろう。それと生活に協同が持てる様にならう。
 お水持ち出さるうしろ。左様なり。

拝啓 16日に便を拝見しました。皆丈夫の由安心です。宏之の離乳経過は良好ですか。元気に笑い丈夫な足を動かしていきましょう。康之は理科を自習させていますか。悪友があるようですね。研究心を育てるために室内室外に於いて常に注意して下さい。小生は幸いに健康で過ごしておりますから、御安心下さい。当地の生活にも慣れました。祖母様は年だから楽に過ごしてもらう様に心掛けなさい。この地方には椰子（ヤシ）が多い。この林は気持ちいいものです。涼風が葉をゆすります。夜は蛍がとんでいる。椰子の実の中にある果汁は思ったほどでもないがよい飲み物です。茄子がある宅でも、毎朝西側の畑に子供達と一緒に切り取っている様を思い浮かべます。パイナップルは皆に食べさせてやりたい。志郎君（いとこ）にもついに来しましたね（召集）。哲一君も遠くに行きみな心配しているでしょう。皆体に気を付けることが一番だ。自分も胃腸の調子はよい様だ。

さようなら

昭和19年10月上旬 フィリッピンより家族へ

御変わりなくお過ごしですか。小生以来至極健康で面白く過ごしているから安心してください。目方は14貫ある。軍隊生活に慣れたのか少しも痩せず、暑さの中を気持ちよく働いています。例年の夏痩せもせずに丈夫なのは、精神が緊張しているからでしょう。戦の進展と共に、家庭に於いても各方面に警戒心を高め子供の教育に注意して下さい。康之は入学に今から準備する必要があります。良友を求め、落ち着いた生活をさせねばなりません。自転車と水泳はどうでした。暢子の教育には特に気を付けて下さい。あまくなならない様にね。秋に食欲と共に、皆病氣にならぬように。そして生活に変化をあたえるように工夫下さい。

当地はこれから1月まで暑くなるという。210日はどうでした。夕立の風雨にバナナの葉が折れてしまうのではないかと思います。夕陽の入る山に毎日毎日変わった雲と色彩が現れて1人面白く見ている。お祖母様をいたわって、楽しい毎日を送ること。

敬白

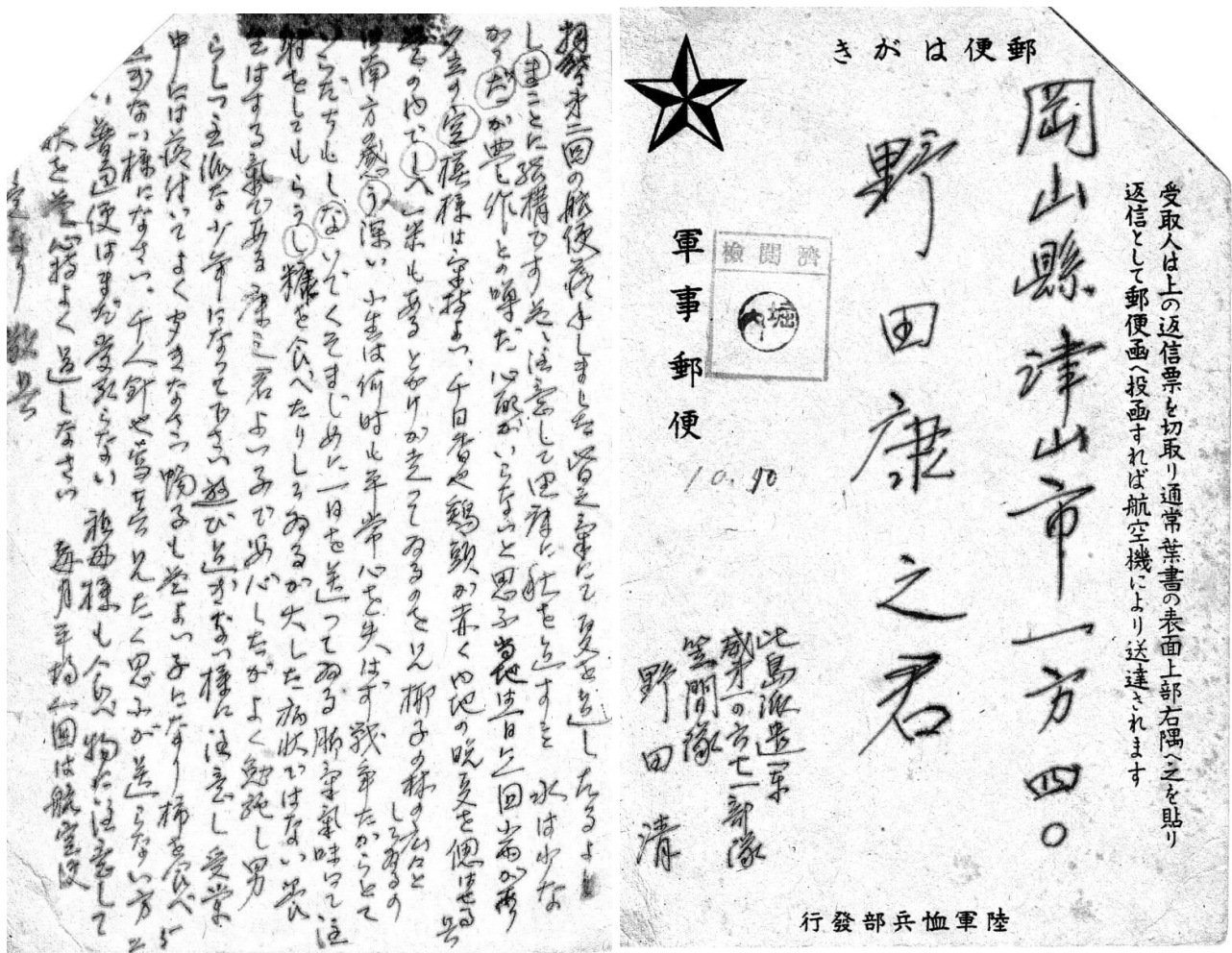
「ルセナ警備」と書いてある。

御変わりなくお過ごしですか。小生以来至極健康で面白く過ごしているから安心してください。目方は14貫ある。軍隊生活に慣れたのか少しも痩せず、暑さの中を気持ちよく働いています。例年の夏痩せもせずに丈夫なのは、精神が緊張しているからでしょう。戦の進展と共に、家庭に於いても各方面に警戒心を高め子供の教育に注意して下さい。康之は入学に今から準備する必要があります。良友を求め、落ち着いた生活をさせねばなりません。自転車と水泳はどうでした。暢子の教育には特に気を付けて下さい。あまくなならない様にね。秋に食欲と共に、皆病氣にならぬように。そして生活に変化をあたえるように工夫下さい。

当地はこれから1月まで暑くなるという。210日はどうでした。夕立の風雨にバナナの葉が折れてしまうのではないかと思います。夕陽の入る山に毎日毎日変わった雲と色彩が現れて1人面白く見ている。お祖母様をいたわって、楽しい毎日を送ること。

敬白

昭和19年10月下旬 フィリッピンより家族へ



「まだ空しゅうなし」と伝えている。

第二回の航便落手しました。皆元気にて夏をすごしたるよしまことに結構です。注意して健康に秋を過ごすこと。水は少なかつたが豊作との噂だ、心配いらないと思ふ。当地は一日に一回小雨があり、夕立の空模様は気持ちよい。千日香や鶏頭が赤く内地の晩夏を思はせる。兵營の内에선長一米もあるとかげが走ってゐるのを見、椰子の林の広々としているのは南方の感うつす。小生は何時も平常心を失はず、戦争だからとていらだちもしないでくそまじめに一日を送ってゐる。脚気気味にて注射をしてもらうし、糖を食べたりしているが、大した病状ではない。養生はする気である。康之君よい子で安心したが、よく勉強し男らしく立派な少年になってください。遊び過ぎないように注意し、授業中には落着いてよく聞きなさい。暢子もよい子になり柿を食べすぎないようになさい。千人針や写真見たく思ふが送らない方がいい。普通便はまだ受け取らない。御祖母様も、食べ物に注意して秋を心持よく過ごしなさい。毎月平均一回は航空便を送る予定なり。 敬具

昭和19年11月上旬 フィリピンより家族へ

手紙と葉書を受け取り、なつかしく読みました。康之君は良い成績を挙げているようで悦んでいる。冬ともなれば、子供達宏之君を相手に面白く遊んでいるでしょうね。こちらは一向に冬の感が出ず、裸の時間が多く、歩くと汗が出て、毎日洗濯をしています。女の人も年中内地の真夏の服装です。子供達をよく取り合ってやりますが、先方日本語も英語も解せず、こちらはタガログ語がわからないので、よく意味は通じない。大きなずいきで鉄砲を造って兵隊ごっこなどをしていますが、日本の子どものように元気よくやっていません。

敵もなかなかへこたれないで、比島をうかがっていますから、何時戦塵にまみれるか知れません。物価は毎日暴騰して、米1升、砂糖1升各100円である。それでも現地の人はゆったりしています。先日、こちらへ金を送った由ですが、当地では馬鹿らしくて、今は何も買えません。それに我々は何も買う必要がない。先に、こちらから3度送金しておいた。物や金を送っても着かないでしょうから心配しない方がよろしい。

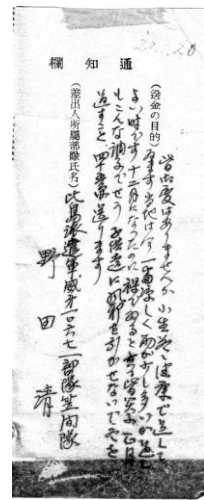
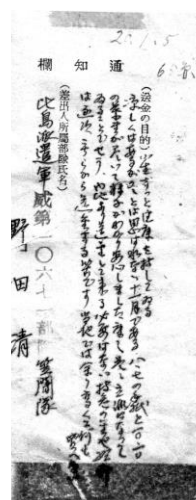
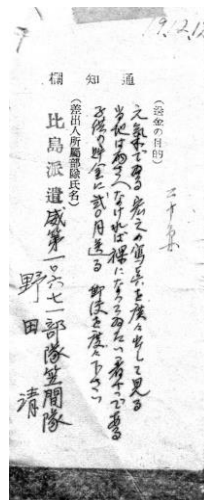
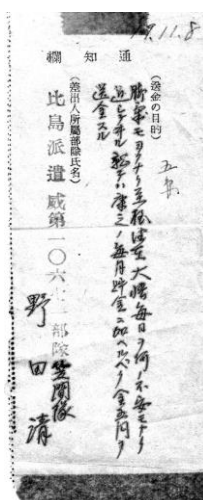
度々、手紙や葉書きを下さい。手紙は丈夫な封筒がよい。椰子やバナナの葉かげから、明らかな月を眺めながら内地の便を待っています。

自分はしっかり肥えて、歩いてみても自分ながらどっしりしていて気持ちがよい。腹も出っ張ってきて、重役タイプになるでしょう。

暢子を幼稚園にやるのに、寄留をして入学させてもよいのではないかと考えてみなさい。火気に注意してなごやかにすごして下さい。

斜文メッセージは見当たりません。

この後、アメリカ軍がフィリピンに上陸し、航空郵便は来なくなりました。ただ、送金する際、通知欄がありわずかに連絡が取れていました。



昭和19年11月8日 昭和19年12月12日 昭和20年1月5日 昭和20年1月20日

昭和19年11月8日着の通知欄

脚気もよくなり、至極体良、大悟毎日何の不安もなく過ごしている。親より、康之の貯金に加えるべく金5円を送金する。

昭和19年12月12日着の通知欄

元気である。宏之の写真を度々出して見る。当地は雨さえなければ、裸になっていた暑さである。子供の貯金に20円送る。郵便をください。

昭和20年1月5日着の通知欄

小生ずっと健康を保っている。涼しくはあるが、冬とは思えない11月である。8月7日の手紙と10月10日の葉書が届いて様子がわかり安心しました。康之増々立派になっているでしょう。内地より送金してくる必要はない。持参の金や物は、順次こちらから送る筈です。当地ではあまりに高くても買えません。

昭和20年1月20日着の通知欄

皆、御変りはありませんか。小生益々健康で過ごしています。当地は今が一番涼しく、雨が少し多いが過ごしよい時です。12月になったのに裸でいると皆笑う。でもこんな調子でしょう。子供に風邪をひかせないで冬を過ごすこと。40円送ります。

これが最後の連絡となりました。マニラ司令部に居たから、昭和20年になっても連絡できたのだろうと思います。

後で聞いたのですが、マニラの司令部でもこの時期は、食糧が無くて困っていたようです。家族に心配をかけまいとしていることがわかります。

戦後、父が復員してくるのではないかと待ち続けていましたが、2年以上経っても帰ってきませんでした。

昭和23年1月20日に死亡通知書が届きました。一緒に送られてきた木箱には、紙が1枚入っていました。

死亡通知書 所属部隊 独立歩兵第358大隊 陸軍伍長 野田清
右 昭和20年7月10日比島ルソン島リサール州イボに於いて 戦死されたので通知いたしますと共に謹んで敬弔の誠を捧げます。

昭和23年1月16日 岡山県民生部長

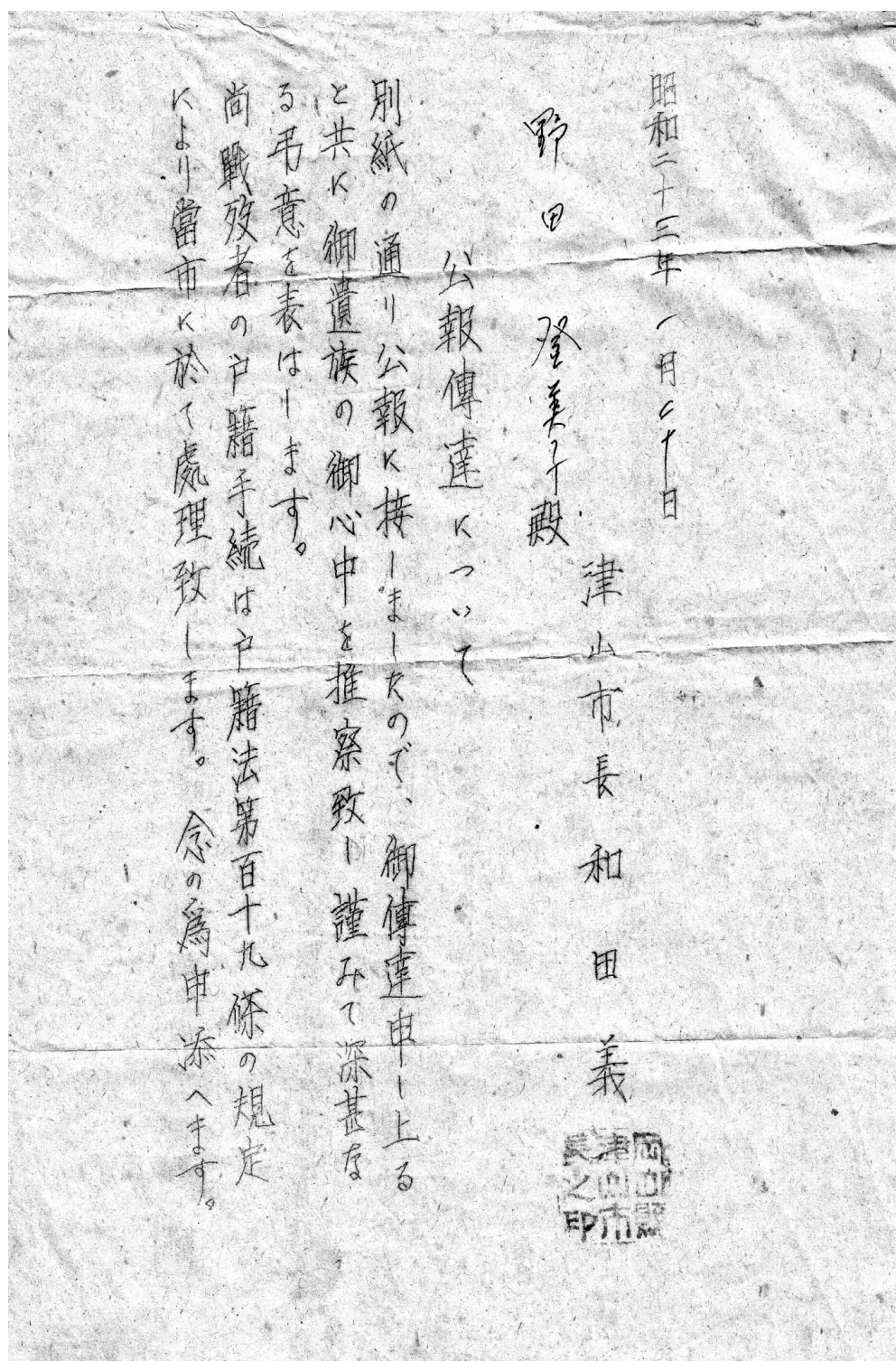
拜啓此度圖らずも陸軍少将 野田 三男殿
御戦役の御通知を差上げに方り謹んで哀悼の誠を捧げま
す。と共ニ御遺族の皆様は哀心より御悔みを申上げます
終戦以来世情急変致しまして今日今更の如く戦歿勇士の
御遺志を想起し又當時晴れの征途を送られて以来到底
言葉にも盡きぬ御遺族皆様の御心情と御苦勞の程を
拜察し他面にて従来國家より與へられたあらゆる
恩典が停止せられたる現情を思ひます。特改めて茲
何と御慰めを申上げてよろしいやら其の言葉も分らない
次第で御座います。唯私が思ひまするに今日の場合と
致しましては時運の違ふところ此の社會の新情勢に順
應しつゝ過去を忘れて平和的文化國家の再建に誠意
努力するより外に日本の進むべき道はないと存じます
萬里異境に戦つてはなほも君國の為に生命を捧げられ
まして大尊い忠魂に酬ゆる為に同胞國民と致しましては
如何にしても國運の復興に盡瘁して立派な文化國家
の再建を成就し又御遺族の皆様方に於かれましては
只管御家運の繁榮に専念せられます事。が真に唯一の
道と信ずるので御座います。左様になりますれば此の

度の諦め切れぬ御陣歿も決して無駄にはならない事と存じます
今後酷薄奇烈な世を生きて抜いて行かれる皆様方の並々ならぬ
御苦勞の程は深くお察し致しますが戦陣に死したる者及其の
家族に想ひを致せば五内為に裂くや宸悼進ばれずした大御心を
拜察せられ又其の間に於ける政府當局の苦心をも諒とせらるゝて
どうか忍び難きを忍び堪へ難きを堪へられつゝ新たなる更生の
勇氣をお出しになり前線の中に希望の道を切り拓いてお進みにな
ります様陰ながら御祈り申上げます
やがては誠忠の家に幸福の扉が開かれ又一般國民も必ずや
改めて忠霊を仰ぐ日が来ることを、確信致します
尚今後御遺族皆様様の處遇其他につきましても何かと御質疑を
御相談がございまして差當り役場の方でも種々盡力されることを
思ひますが當部と致しましては出来得る限りの御力添へを申上げ
た所存でございますからどうぞ御遠慮なく御申聞け下さい
終りに臨み重ねて英霊の御冥福と御遺族皆様様の御多幸とを
切に御祈り申上げます

昭和二十三年一月十六日

岡山縣民生部長

昭和23年1月16日に岡山縣民生部長から届いた「戦死通知」



野田登美子殿

昭和23年1月20日 津山市長 和田義一

公報伝達について

別紙のとおり公報に接しましたので、御伝達申し上げると共に、御遺族の御心中を推察致し、謹しみて深堪なる弔意を表はします。

尚、戦死者の戸籍手続きは、戸籍法第119条の規定により、当市に於いて処理致します。念のため申し添へます。

この後、母（登美子）は、父が戦死した時の状況を知ろうと、姫路を中心に同じ部隊にいた人を調べて手紙を出したりお宅へ訪ねたりして調査をしました。その結果、入隊してから一緒にいた姫路市の内海芳男さんという方を見つけ、手紙をもらうとともに、お宅に行き話を聞くことができました。

父は姫路連隊第46部隊に入隊したあと訓練を受け、広島からフィリピンに派遣されました。3隻の輸送船で出発したのですが、2隻は沖縄付近でアメリカ軍の潜水艦に沈められたようです。

フィリピンに上陸後、マニラの南方軍総司令部（司令長官山下大将）に入り、田辺中尉の下11人で、通信・金銭出納・企画・集荷・配給等の仕事をしていました。野田（父）、青木、長谷川は奥藤、松本の下で通信・金銭出納・企画をしていました。福島、片山、川口、山北は内海、田中の下で集荷・配給・保存などの仕事をしていました。この中で、生きて帰ってきたのは、内海と田辺の2人だけのようにでした。

戦争が激しくなり、司令部は1月以降最後の陣地と頼む、マニラ市北東45kmのマニラの水源地でもあるイボ町へ移動しました。ここは、少し行くと港や飛行場があり、アメリカ軍上陸も眼下に見えるところがありましたが、ほとんどが太古のジャングルでした。

昭和20年5月中旬、松本、奥藤は戦死し、兵团主力はやむなく後退することになり、ジャングルに入りました。田中、内海、田辺は残り、野田らは本部隊と行動を共にしたので、その後のことはわかりませんが、昭和20年7月10日、本部は全員でマニラに最後の攻撃をかけ、その日以降、野田とは連絡が取れなくなったのです。

別れるとき、内地の家族に届けるべく、それぞれ自分の持ち物を分けて渡し合っていたのですが、米軍に捕まった時に取られてしまいました。

比島では、昭和20年1月以降、日本の飛行機は全く飛ばず、米軍の思うままに、砲撃、爆撃は全く雨霧の如く寸秒も待たずだったのです。食糧は無く兵器も焼損しジャングルの中は四方見通しもきかず、方向がわからない状態でした。

栄養失調の上に病気が広がり、ほとんどの人が死亡しました。残ったのは7人に1人くらいだったのです。生きて捕まった人も精神的にまいっていたようです。

母は農業をしながら3人の子どもを育ててくれました。康之は岡山大学を卒業し教員となって、林野高校津山高校・岡山大学・美作大学・津山高専などで務め

ました。暢子は津山高校卒業後、富士銀行に就職しました。
宏之は同志社大学卒業後、石油会社の社長をしています。
母、登美子は8人の孫と15人のひ孫に恵まれ94歳まで
生きました。



野田康之さん
79歳

影山命住さん

平成28年5月19日取材

私は小学校4年生の時、京都の伯母の家に預けられていました。その家には子どもがいなかったので、養子にしようということだったのだと思いますが、養子にはならず、1年ほどで勝北の実家に戻りました。尋常小学校を卒業した後、青年学校に入学しました。当時、津山の中学校に行かない子どもは、青年学校に行くか、現在の中学校入学の年齢で、家を手伝ったり働いたりする子もいました。

私は青年学校に1年通ったのち、13歳で神戸の川崎造船所の潜水艦部に就職し、潜水艦の部品を組み立てる仕事に就きました。宿舎の側に教室があり、週に1日は授業を受けました。皆、志願して兵隊になりたいと思っていました。

3年間勤務しましたが「予科練に入って、お国のために戦わなければいけない」と強く思うようになり、昭和19年、海軍飛行予科練習生（予科練）を志願し学科と身体測定を受けました。私は小柄で身長が規定より5cm足りなかったのですが「まだ若いから、これから伸びるだろう」と試験官に言われ、合格しました。予科練とは航空兵を養成するところで、『若鷲の歌』（予科練の歌）が流行り人気があり、憧れのように思っていました。

入隊が決まると、川崎造船所があった神戸から、勝北町の実家に1日だけ帰りました。私には3歳年上の兄がいて、まだ兵隊に行っていなかったので「お前は兵隊になるんか！」と、父に叱られたのを覚えています。翌朝5時に、家からすぐ

近くの東加茂神社に近所の人たちが集まり、武運長久を祈った寄書きの日章旗をいただき盛大に見送って下さいました。あいさつを済ませると、近所の方の自転車の荷台に乗せてもらい高野駅まで送ってもらい、汽車で鹿児島に向かいました。

そして昭和19年12月30日、鹿児島県の串良（くしら）海軍航空隊に飛行予科練生として入隊しました。1棟の兵舎に約30人が入り、4棟ほどあったと思います。基本的な軍事訓練、学科、操縦に関することなどを学びました。その頃には戦況は厳しくなり、燃料や練習機が少なくなっていましたので、操縦の勉強をしても実際に飛行機に乗る訓練だけはできませんでした。

串良から少し離れた所に、鹿屋（かのや）海軍航空基地があり、串良の予科練で訓練を終えた人が鹿屋基地に配属されていました。そこには飛行機がたくさんあるようでしたが、毎週のように、爆弾を積んだ飛行機3～4機が沖縄に向けて特攻に飛び立っていくのが串良から見えるので、皆で見送りをすることがありました。特攻に出撃した飛行機も操縦者も帰ってくることはないので、鹿屋の飛行機もどんどん減っていきました。

昭和20年3月、鹿屋の基地に敵機が爆弾を落としました。串良の私たちの兵舎には2度ほど3～4機の敵機が来て、バリバリバリ！と兵舎めがけて機関銃で打たれたことがあり、そのたび裏山に逃げていたので3度目の敵機の襲来の際も裏山に逃げました。しかし、3度目は機関銃だけでなく焼夷弾を落とされたので、兵舎は焼けてしまったのです。兵舎のそばには、ひとつに5人くらいは入れる塹壕（ざんごう）という溝のような防空壕を掘っていましたが、その時の空襲で塹壕は壊れ、山に逃げなかった練習生は大勢亡くなりました。

兵舎が壊れてしまったので、12～13人ずつに分かれて数km離れた公会堂に移動しました。そこでは地域の婦人会の方が炊き出しに来て下さいました。兵舎は爆撃されましたが、民家ばかりの地域は無事だったのです。そして終戦までの数ヶ月は公会堂で待機するしかなかったのです。

串良の兵舎がやられてしまい、私たちの訓練は中断されましたが、その後、終



予科練へ出発当日、日章旗には近所の方の寄書が施してある

戦までの間、串良基地からは多くの特攻隊員が沖縄に向けて出撃されたそうです。

8月15日、終戦は軍隊の方からの話で知りましたが「帰れる日はまだ分からないから待機するように」と言われて数日待機し、いよいよ帰れるという日が来ました。

串良から都城（みやこのじょう）まで汽車で帰ったのですが、汽車は兵隊でいっぱい、車両はもちろん満員、車両の外にしがみついたり屋根に上がったりしている人もいました。人の重さで、都城駅近くの急こう配のトンネルで汽車が動かなくなってしまったのです。汽車は都城駅までバックで戻って、乗客を数回に分けて門司（もじ）まで乗せていき、また帰ってくるのを待たなければならなかったのです。都城駅で3日ほど汽車を待ちやっとな乗ることができました。鹿児島から帰る兵隊と、中国や朝鮮などからの引き揚げ者で、とにかくすごい人数でした。カンパンやビスケットを少し支給されたと思いますが、水は列車が停車した時に川まで走っていき飲んだことがあります。

広島を通った時には町には何もなくて線路だけが通っているという光景に驚きました。

昭和20年9月上旬に、勝北の家に帰りました。その後は、家の田畑の手伝いと池で魚釣りなどをしていましたが、しばらくして加茂町にある伯母の家に大工仕事を習いに行き2日ほど泊まっては自転車で帰って来るといった大工見習いを4年ほどしました。近所の棟梁にも付いて行き仕事を習ったりもしました。私が初めて建てた建物は、自分の家の大きい物置です。それを見た近所の人「うちのも造ってもらえんか」と言われ、それから徐々に依頼が増え75歳まで大工を続けました。

結婚後、妻を連れて串良兵舎があった場所に行くと、すっかり様子は変わっていました。

予科練生は現在の中学生、高校生の年齢です。その年齢で国を守るための訓練を受け特攻に行き、多くの若者が亡くなったのです。

戦争の時代を経験して思うことは、戦争は絶対にしてはいけないということです。



影山命住さん

89歳

語り継ぐ 私の戦争体験

平成 28 年 9 月 15 日 発行

発行者 津山市

編集者 津山市総務部人権啓発課

〒708-8520

岡山県津山市新魚町 17 アルネ・津山 5 階

電話番号 0868-31-0088